を染めて色々に葺かせて。内々のしつらひには。いふべくもあらぬ綾織物に繪をかきて。間毎に張りたり。もとの妻どもは皆おひはらひて。かくや姫を必あはん設して。獨あかしくらし給ふ。

つかはし〻人々。夜晝まちたまふに。年こゆるまで音もせず。心もとながりて。いと忍びて。たゞ舍人二人召織として。やつれ給ひて。難波の邊におはしまして。問ひ給ふ事は。大伴の大納言の人や船に乘りて龍ころして。りが首の玉取れるとや聞く。と問はするに。船人答へて曰く。怪しき事かなと笑ひて。さるわざする船も無し。と答ふるに。をぢなき言する船人にも有るかな。え知らでかくいふと思して。我弓の力は。龍あらばふと射殺して。首の玉は取りてん。遲く來る奴原を待たじと宣ひて。船に乘りて海毎にありき給ふに。いと遠くて。筑紫のかたの海に漕ぎ出で給ひぬ。

いかゞしけん。早き風吹きて。世界くらがりて。船を吹きもてありく。何れの方とも知らず。船を海中にまかりいでぬべく吹きまはして。波は

船に打ちかけつ〻卷き入れ。神は落ちかゝるやうにひらめきかゝるに。大納言は惑ひて。またかゝるさびしき目は見ず。いかならんとするゞとのたまふ。

機取こたへて申す。こゝら船に乘りてまかりありくに。またかくわびしき目を見ず。御船海の底に入らずは。神おちかゝりぬべし。もし幸に神の助あらば。南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕へまつりて。すゞろなる死をすべかめるかなとて。機取泣く。

大納言これを聞きて宣はく。船に乘りては。機取の申す事をこそ高き山とも頼め。などかく頼もしげなき事を申すゞと。青へどをつきて宣ふ。

機取こたへて申す。神ならねば。何わざをか仕うまつらん。風吹き波烈しけれども。神さへ頂に落ちかゝるやうなるは。龍を殺さんと求め給ひさぶらへば。かくあなり。はやても龍の吹かするなり。はや神に祈り給へといふ。

よき事なりとて。機取の御神きこしめせ。をぢなく心をさなく。龍を殺

さんと思ひけり。今より後は。毛の末一筋をだに動かし奉らじと。よごとを放ちて。立ちぬ泣く〳〵呼ばひ給ふ事。千たびばかり申し給ふけにやあらん。やう〳〵神鳴り止みぬ。すこし明り。風は猶早く吹く。

機取の曰く。これは龍のしわざにこそ有りけれ。此吹く風はよき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よき方に趣きて吹くなりといへども。大納言はこれを聞き入れ給はず。

三四日ありて吹き返し寄せたり。濱を見れば播磨の明石の濱なりけり。大納言南海の濱に吹きよせられたるにやあらん。と思ひて。息衝き伏し給へり。

船にある男ども國に告げたれば。國の司まうでとぶらふにも。得起き上り給はで。船底に伏し給へり。松原に御莚敷きてれろし奉る。其時にぞ。南海にあらざりけりと思ひて。からうじて起きあがり給へるを見れば。風いと重き人にて腹いと膨れ。こなたかなたの目には。李を二つ附けたるやうなり。これを見奉りてぞ。國の司もほゝゑみたる。

國に仰せ給ひて。腰輿つくらせ給ひて。によふ〳〵荷なはれて。家に入り給ひぬるを。いかでか聞きけん。つかはし〻男ども參りて申すやう。龍の首の玉を得取らざりしかばなん。殿へも得參らざりし。玉の取りがたかりし事を知り給へればなん。勘當あらじとて參りつる。と申す。

大納言起き出でゝ宣はく。汝等よく持て來ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこうありけれ。それが玉を取らんとて。うこらの人々の害せられなんとしけり。まして龍を捕へたらましかば。又こともなく我は害せられなましし。よく捕へずなりにけり。かくや姫てふ大盜人の奴が。人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。をのこどもゝなありきそとて。家に少し殘りたりけるものどもは。龍の玉とらぬものどもに給びつ。これを聞きて。離れ給ひし元の上は。腹をきりて笑ひ給ふ。糸を葺かせて作れりし屋は。鳶烏の巣に皆くひもていにけり。

世界の人の言ひけるは。大伴の大納言は龍の首の玉や取りてれはしたる。いなさもあらず。御眼二つに李のやうなる玉を添へていましたる。とい

ひければ。あなたへがたといひけるよりぞ。世に合はぬ事をば。あなたへがたとは言ひ始めける。（竹取物語）

都鳥

作者知らず

むかし男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして。京には居らじ。東の方に住むべきところ求めにとて。行きけり。

信濃の國淺間の嶽に烟の立つを見て。

しなのなる　淺間の嶽に　立つ烟
遠方人の　見やはとがめぬ

もとより友とする人。一人二人して諸共に行きけり。道知れる人も無くて惑ひ行きけり。三河の國八橋といふ處に至りぬ。そこを八橋といふ事は。水の蜘蛛手に流れ分れて。木八つ渡せるによりてなん。八橋とはいへる。その澤のほとりの木陰におりゐて。かれいひ食ひけり。その澤に杜若いと面白く咲きたり。それを見て或人の曰く。かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて。旅の心をよめといひければ。よめる

唐ころも　きつゝ馴れにし　妻しあれば
はるゝ〳〵來ぬる　旅をしぞ思ふ

とよめりければ。皆人かれいひの上に涙おとして。ほとびにけり。

ゆき〳〵て駿河の國に至りぬ。宇津の山に至りて。わが入らんとする道は。いと暗う細きに。蔦かづらは茂りて。物心細くすごろなる目を見る事と思ふに。修行者あひたり。かゝる道には如何でかおはするといふに。見れば見し人なりけり。京に其人のもとにとて。文書きて附く。

するがなる　宇津の山邊の　うつゝにも
夢にも人の　逢はぬなりけり

富士の山を見れば。五月の晦日に雪いと白う降れり。

時知らぬ　山は富士の嶺　いつとてか
鹿の子まだらに　雪の降るらん

この山はこゝに譬へば。比叡の山を二十ばかり重ね上げたらん程して。なりは鹽尻のやうになんありける。

なほ行き〳〵て。武藏の國と下總の國との中に。いと大きなる河あり。それを隅田河といふ。その河の邊に群れゐて思ひやれば。限なく遠くも來にけるかな。とわびあへるに。渡守はや船に乘れ。日も暮れなんといふに。乘りて。渡らんとするに。皆人もものわびしくて。京に思ふ人なきにしもあらず。

さる折しも。白き鳥の嘴と足と赤き。鴫の大きなる。水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば。皆人見知らず。渡守に問ひければ。これなん都鳥といふを聞きて。

名にし負はゞ　いざ言問はん　都鳥
わが思ふ人は　ありやなしやと

とよめりければ。船こぐりて泣きにけり。（伊勢物語）

小野の雪

同じく

むかし水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王。例の狩しにおはします御供に。右馬の頭なる翁つかうまつれり。日頃經て宮に歸り給ひけり。御おくりしてとくいなんと思ふに。大御酒たまひ祿たまはんとて。つかはさざりけり。

この右馬の頭こゝろもとながりて。

枕とて　草ひきむすぶ　事もせじ
秋の夜とだに　たのまれなくに

とよみける。時は彌生の晦日なりけり。親王おほとのごもりで明し給ひてけり。

かくしつゝ詣で仕うまつりけるを。思の外に御髮おろさせ給ひて。小野といふ處に住み給ひけり。むつ月に拜みまつらんとて。小野に詣でたるに。比叡の山の麓なれば。雪いと高し。强ひて御室に詣でゝ拜みまつるに。つれ〳〵といと物がなしくておはしましければ。やゝ久しくさぶらひて。古の事など思ひ出で聞えさせけり。

さても侍ひてしがなと思へど。公事どもありければ。得さぶらはで夕暮に歸るとて。

忘れては　夢かとぞおもふ　思ひきや
雪ふみわけて　君を見んとは

とてなん。泣く〳〵來にける。（伊勢物語）

家の集の內

伊勢

大和に三月ばかりに住むにさう〳〵しく。寺めぐりせんと思ひてありきけるに。龍門といふ寺にまうでゝ。む月の十日あまりになんありける。見れば其堂のありさま。瀧は雲の中より落ちくるやうに見ゆ。仙の岩屋といふは。いたく年つもりて。岩の上の苔やへむしたり。あはれにたふとくおぼえて。涙おつる瀧におとらず。

見知らぬ心地に。たぐひなくめでたく見て。ものがなしく都れもひやられて。石のもとに暫しながむるに。此寺いとくらうなりぬ。雨や降らんとすらんと。ともにある人々いそぎければ。雨はふらじ雪などいふほどに。雪さらばかりにてかきくらしふる。

ある人々。いざ歌よまんといひければ。

裁ち縫はぬ　きぬ着し人も　なきものを
なに山姫の　布さらすらん

とよみたりければ。異人よまずなりにけり。

けふは道に出でゝ。こしといふ處に宿りぬ。かの寺のあはれなりし事。おもひいでゝ又。

見もはてど　空に消えなで　かぎりなく
いとふうき身の　世に歸るらん

と獨ごちて。袖もしをるばかりにゞ。泣きぬらしける。

（中略）

かくて帝おりゐさせ給ひて。二年といふに御髪おろさせ給ひて。仁和寺といふところに住み給うて。時々ゞ后の宮にはおはしましける。后の宮も仕うまつる人も。限なう悲しと見たてまつる。もと住み給ひし處に帝おはしまして。御とききこしめす。つかまつりし人など召しいでゝ御おろし給ふ。后の宮の御かたよりよみて出だし給へり。

言の葉に　たえせぬ露は　置くらんや
　　むかしおぼゆる　圓居したれば

御かへし。

海とのみ　まとゐの中は　なりぬなり
　　そながらあらぬ　君が見ゆれば

となん。

この帝に仕うまつりて子うみたりし人は。世に幸なきものなりければ。うみたてまつりし君は。八つにて失せ給ひにける。いみじく悲しと思へどかひなし。死なんと思へど死なれねば。夜晝なきわたるに。此みこに名づけたりし人のいへりける。

思ふより　いふはおろかに　なりぬれば
　　たとへていはん　言の葉もなし

といへど。更にものもおぼえねば。返事もせずなりにけり。

歸りける年の五月に。時鳥なくを聞きて獨かこちける。

しでの山　こえてきつらん　ほとゝぎす
　　戀しき人の　うへかたらなん

今は心うがりて。もとの宮づかへをなんしける。

后の御心は。限なくめでたくなまめきて。世にたぐひなくなんおはしましける。此ほどの曹司には。前栽などいとをかしう植ゑてなん住みける。秋の頃里に出でたるに。宮より。などか今までは參らぬ。遲く參れば花の盛も皆すぎぬべし。松虫も鳴きやみぬべかめりとなん。のたまはせける。御返事に。

松むしも　鳴きやみぬなり　秋の野に
　　誰よぶとてか　花見にもこん

御かへし。

呼ぶとしも　聲はきこえて　花すゝき
　　しのびに招く　袖も見ゆめり

又かく聞えさせたりけり。

人も着ぬ　尾花が袖に　まねかれて
いとどあだなる　名をや立てなん

御かへし。

我まねく　袖とも知らで　花すゝき
色かはるとぞ　思ひわびける

歌めす奥に書きてまゐらす。

山川の　れとにのみ聞く　百敷を
みをはやながら　見るよしもがな

常も惱ましうせさせ給ひけるを。つひに六月に隱れさせ給ひにける。あさましくいみじく悲しくて。つかまつりし人さながら集まりて。夜晝なきこひたてまつるに。後の御わざの折にやう〳〵なりぬ。

雨の降る日。心うしといひし人。下になんこもりゐたりける。うへの人あつまりて御わざの組をなんしける。下なる人。糸はよりはて給ふべかなり。唯今なにわざをかし給ふ。こゝには雨をなん見いだしてながめ侍

るを。いひあげたりければ。うへの御もとたちの返しには。糸はよりはて〻。今は音をなんよりあはせて泣き侍るを。いひれこせければ。下なる人。

よりあはせて　泣くなる聲を　糸にして
我なみだをば　玉にぬかなん

（伊勢家集）

檜垣嫗

清原のもとすけの守。京へのぼりしに。門出の處に呼びて。はじめ筑後の守なりしに。程もなく此國に來て。ふたゝびあひ見つるに。今は吾も人も老いにたり。また筑紫のかたにくべきにあらず。いざかし京へなど戯ぶるゝに。妻の周防の命婦。ものなどかづけて。今かくいふと思ひも出でじものを。などやうにいひたるに。

白河の　うこの水ひて　塵立たん
時にぞ君を　れもひわすれん

（中略）

老に極めて。すみかもなくなりて。手づから水汲む際になりて。桶を引き提げて出づるにしも。國の守しばし出でらるゝ道にさしあひて。目かどなるもの見つけて。などかくはなど見とがむるに。名たかき檜垣なりと人のいへば。はた隱るゝに呼び出づ。

はづかしけれど隱れどころもなくて。桶を岸に置きて居たれば。いかでいとかくはありしが。あはれなどあれば。れもひわびて。

老いはてゝ　かしらの髪は　白河の
みつわくむまで　なりにけるかな

（檜垣嫗家集）

大井川行幸和歌の序

紀貫之

あはれ我君の御代。長月の九日と昨日いひて。殘れる菊おこし見たまはん。また暮れぬべき秋を惜み給はんとて。月の桂のこなた。春の梅津より御舟よりひて。渡守を召して。夕月夜小倉山のほとり。行く水の大井の川邊に行幸したまへれば。久方の空には棚引ける雲もなく。みゆきを待ち。流るゝ水底には濁れる塵なくて。おほん心にぞかなへると。詔して。おほせたまふ事は。秋の水に浮びては。流るゝ木の葉とあやまたれ。秋の山を見れば。織る人なき錦とおもほえ。もみぢの葉の嵐に散りて。曇らぬ雨と聞え。菊の花の岸に殘れるを。空なる星と驚き。霜の鶴川邊に立ちて。雲のおるかと疑はれ。夕の猿山の峽に啼きて。人の涙をおとし。旅の雁雲路にまどひて。玉づさと見え。遊ぶ鷗水にすみて。人に馴れたり。入江の松いくよ經ぬらんと。いふことをぞよませ給ふ。

われら短き心の。このもかのもにまどひ。拙き言の葉。吹く風の空に亂れつゝ。草葉の露とゝもに。うれしき涙おち。岩波とゝもに。よろこぼしき心ぞ立ちかへる。もし此言の葉。世の末までのこり。今を昔にくらべて。後の今日を聞かん人。海士の栲繩くりかへし。忍の草の忍ばざらめや。

古今和歌集の序

同じ人

やまと歌は。人の心を種として。よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人。ことわざしげきものなれば。心に思ふ事を。見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり花に鳴く鶯。水に住む蛙の聲を聞けば。生きとし生けるもの。何れか歌をよまざりける。力をも入れずして天地を動かし。目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ。男女の中をもやはらげ。たけき武士の心をも慰むるは。歌なり。

この歌。天地の開けはじまりける時より。出できにけり。しかあれども世に傳はることは。久方の天にしては下照姫に始まり。あらかねの地にしては。すさのをのみことよりぞ起りける。千早ぶる神代には。歌の文字も定まらず。すなほにして言の心わきがたかりけらし。人の世となりて。すさのをのみことよりぞ。三十文字あまり一文字はよみける。かくてぞ。花をめで。鳥をうらやみ。霞をあはれび。露をかなしぶ心言葉。多くさまざまになりにける。遠きところも。出で立つ足もとより始まりて。年月をわたり。高き山も麓の塵泥より成りて。天雲たなびくまで生ひのぼれる如くに。此歌もかくの如くなるべし。

難波津の歌は。みかどのおほん始なり。淺香山の言の葉は。采女の戯ぶれよりよみて。この二歌は。歌の父母のやうにてぞ。手習ふ人の始にもしける。

うもゝ歌のさま六つなり。唐の歌にもかくがあるべき。うの六種の一つにはうへうた。二つにはかがへうた。三つにはなずらへうた。四つにはたとへうた。五つにはたゞことうた。六つにはいはひうた。今の世の中。色につき。人のこゝろ花になりにけるより。あだなる歌。はかなき言のみ出でくれば。色ごのみの家に。埋木の人もれぬ事となりて。まめなるところには。花薄ほに出だすべき事にもあらずなりにたり。うの始を思へば。かゝるべくなんあらぬ。

いにしへ代々のみかど。春の花のあした。秋の月の夜毎に。さぶらふ人々をめして。事につけつゝ歌を奉らしめ給ふ。あるは花をもてあそぶとて。たよりなき處にまどひ。あるは月をれもふとて。しるべなき闇にた

どれる心々を見たまひて。賢し愚なりと知らしめしたりけん。しかあるのみにあらず。さゞれ石にたとへ。筑波山にかけて君を願ひ。よろこび身に過ぎ。樂しび心に餘り。富士の煙によりへて人を戀ひ。松虫の音に友を忍び。高砂住の江の松も相生のやうに覺ゆ。男山の昔を思ひ出でゝ。女郎花の一時をくねるにも。歌をいひてゞ慰めける。また春のあしたに花の散るを見。秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き。あるは年毎に鏡の影に見ゆる雪と波とを歎き。草のつゆ水の泡を見て我身を驚き。あるは昨日は榮ゆれどりて。時を失ひ世にわび。親しかりしも疎くなり。あるは松山の波をかけ。野中の水を汲み。秋萩の下葉をながめ。曉の鳴の羽ねがきを數へ。あるは呉竹のうきふしを人にいひ。吉野川をひきて世の中を恨みきつるに。今は富士の山も烟立たずなり。長柄の橋も造るなりと聞く人は。歌にのみゞ心を慰めける。いにしへよりかく傳はるうちにも。奈良の御時よりゞひろまりにける。かの御代や。歌の心を知らしめしたりけん。かの御時に。正三位柿本の人麿なん歌の聖なりける。これは君も人も身を合はせたりといふなるべし。秋のゆふべ立田川に流るゝ紅葉をば。みかどの御目に錦と見たまひ。春のあした吉野山の櫻は。人麿が心には。雲かとのみなんおぼえける。また山のべの赤人といふ人ありけり。歌にあやしく妙なりけり。人麿は赤人が上に立たんこと難く。赤人は人麿が下に立たんこと。かたくなんありける。此人々をねきて。又すぐれたる人も。呉竹の代々に聞え。片糸のより〳〵に絶えずゞありける。これよりさきの歌を集めてなん。萬葉集と名づけられたりける。

こゝに古の事をも。歌の心をも知れる人。わづかに一人二人なりき。しかはあれど。これかれ得たるところ得ぬところ。たがひになんある。かの御時よりこのかた。年は百とせあまり。世は十つぎになんなりにける。いにしへの事をも歌をも。知れる人よむ人おほからず。今この事をいふに。官位たかき人をば。たやすきやうなれば言はず。その外に近き世に。その名聞えたる人は。すなはち僧正遍昭は。歌のさま

は得たれども。誠すくなし。たとへば薄にかける女を見て。いたづらに心を動かすが如し。

在原の業平は。その心あまりありて言葉足らず。しぼめる花の色なくて。にほひ殘れるが如し。

文屋の康秀は。言葉たくみて其さま身におはず。いはゞ商人の。よき衣きたらんが如し。

宇治山の僧喜撰は。言葉かすかにして。始終たしかならず。いはゞ秋の月を見るに。曉の雲にあへるが如し。

小野の小町は。古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて强からず。いはゞよき女の。惱める所あるに似たり。强からぬは。女の歌なればなるべし。

大友の黑主は。そのさまいやし。いはゞ薪負へる山人の。花の陰に休めるが如し。

此外の人々その名聞ゆる。野邊に生ふる葛のはひ廣ごり。林に茂き木の

葉の如くに多かれど。歌とのみ思ひて。りのさま知らぬなるべし。

かゝるに今すべらぎの。天の下しろしめす事。四つの時こゝのかへりになんなりぬる。あまねき御うつくしみの波。八島の外まで流れ。廣き御めぐみの蔭。筑波山の麓よりも茂くれはしまして。萬の政を聞しめす暇。もろ〳〵の事を捨て給はぬあまりに。古の事をも忘れじ。ふりにし事をも興し給ふとて。今も見りなはし。後の世にも傳はれとて。延喜五年四月十八日に。大內記紀の友則。御書所の預紀の貫之。前の甲斐の目凡河內の躬恒。右衛門の府壬生の忠岑らに仰せられて。萬葉集に入らぬ古き歌。みづからのをも奉らしめ給ひてなん。りれが中にも。梅をかざすより始めて。時鳥を聞き。紅葉を折り。雪を見るに至るまで。また鶴龜につけて君を思ひ。人をも祝ひ。秋萩夏草を見て妻を戀ひ。逢坂山に至りて手向を祈り。あるは春夏秋冬にも入らぬ。くさ〴〵の歌をなん。撰ばせ給ひける。

すべて千歌二十卷。名づけて古今和歌集といふ。かく此たび集め撰ばれ

て。山下水の絶ねず。濱の眞砂の數れほく積りぬれば。今は飛鳥川の瀬になる恨も聞ねず。さゞれ石の巖となる喜のみずあるべき。

うれまくら。言葉は春の花のにほひすくなくして。空しき名のみ。秋の夜の長きをかこてれば。かつは人の耳に恐り。かつは歌の心に耻ぢ思へど。たなびく雲の立居。鳴く鹿の起臥は。貫之らが此世に同じく生れて。この事の時にあへるをなん。よろこびぬる。

人麿なくなりにたれど。歌のこと留まれるかな。たとひ時移り事去り。樂しび悲しびゆきかふとも。この歌のもじあるをや。青柳の糸たねず。松の葉の散り失せずして。正木のかづら長く傳はり。鳥の跡久しく留まれらば。歌のさまをも知り。ことの心を得たらん人は。大空の月を見るが如くに。古を仰ぎて今を戀ひざらめかも。（古今和歌集）

紀行の内　同じ人

十九日。日あしければ舟いださず。

廿日。きのふのやうなれば船いださず。皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ。たゞ日の經ぬる數を。今日幾日。廿日三十日とかゞふれば。およびもうこなはれぬべし。夜はいも寐ず。いとわびし。

廿日の夜の月いでにけり。山の端もなくて海の中よりゞ出でくる。かうやうなるを見てや。むかし安倍の仲麿といひける人は。もろこしに渡りて歸りきたる時に。船に乘るべき處にて。かの國人うまのはなむけし別れ惜みて。かしこの唐歌つくりなどしける。あかずやありけん。廿日の夜の月いづるまでゞありける。その月は海よりゞ出でける。

うれを見て仲麿のぬし。我國にはかゝる歌なん。神代より神もよみたび。今は上中下の人も。かうやうに別れ惜み。喜びもあり悲しみもある時にはよむとて。よめりける歌。

青海原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも

とゞよめりける。

かの國の人聞き知るまじくおぼえたれど。言の心を。男文字にさまを書

き出だして。こゝの言葉傳へたる人に。言ひ知らせければ。心をや聞き得たりけん。いと思の外になんめでける。もろこしと此國とは。言葉ことなるものなれど。月の影は同じ事なるべければ。人の心も同じことにやあらん。

さて今うのかみを思ひやりて。或る人のよめる歌。

都にて　山の端に見し　月なれど
　　波より出でゝ　波にこそ入れ

廿一日。卯の時ばかりに船出す。みな人々の船出づ。これを見れば。春の海に。秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。おぼろけの願によりてにやあらん。風も吹かず。よき日出でゝ漕ぎゆく。

この間に。使はれんとて附きてくる童あり。うれが歌ふ歌。

なほこそ　國のかたは　見やらるれ
　わが父母　ありとしおもへば　かへらや

と歌ふあはれなる。かく歌ふを聞きつゝこぎくるに。黒鳥といふ鳥。

巌の上に集まり居り。うの巌のもとに波白く打ち寄す。櫂取のいふやう。黒鳥のもとに白き波をよすとぞいふ。この言葉何とはなけれど。物言ふやうにぞ聞えたる。人の程にあはねばとがむるなり。

かくいひつゝゆくに。船君なる人なみを見て。國より始めて。海賊むくいせんといふなる事を思ふ上に。波の又恐ろしければ。頭も皆白けぬ。七十八十は。海にあるものなりけり。

わが髪の　雪と磯邊の　白波と
　いづれまされり　沖つ島守

櫂取いへ。

（中略）

廿九日。船出だしてゆく。うら〳〵と照りて漕ぎゆく。爪のいと長くなりにたるを見て。日を數ふれば。今日は子の日になりければ切らず。むつきなれば。京の子の日の事いひいでゝ。小松もがなといへど。海中なれば難しかし。ある女の書きて出だせる歌。

おぼつかな　今日は子の日か　海人ならば
　　海松をだに　引かましものを

とがいへる。海にて子の日の歌にては。いかゞあらん。ある人のよめる歌。

けふなれど　若菜も摘まず　春日野の
　　わが潛ぎわたる　浦になければ

かくいひつゝ潛ぎゆく。

面白き處に船をよせて。こゝやいづこと問ひければ。土佐の泊とがいひける。むかし土佐といひける處に住みける女。この船にまじりけり。それがいひけらく。むかし暫しありし處の。名たぐひにがあなる。あはれといひて。よめる歌。

年ごろを　住みしところの　名にしおへば
　　きよる波をも　あはれとが見る

（中略）

十六日。今日の夕つかた。京へ上るついでに見れば。山崎の棚なる小樫の繪も。粮餅の法螺の形もかはらざりけり。賢る人の心をが知らぬ。とがいふなる。

かくて京へゆくに。島坂にて人あるじゝたり。必しもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは。くる時が人はとかくありける。これにもそれにも返りごとす。

夜になして京には入らんと思へば。急ぎしもせぬほどに。月いでぬ。桂川月のあかきにが渡る。人々の曰く。この川あすか川にもあらねば。淵瀬さらに變はらざりけりといひて。ある人のよめる歌。

久方の　月に生ひたる　かつら川
　　底なる影も　かはらざりけり

又ある人のいへる

天雲の　はるかなりつる　桂がは
　　袖をひてゝも　渡りぬるかな

又ある人のよめる。

かつら川　わが心にも　かよはねど
　　同じ深さに　なかるべらなり

都のうれしきあまりに。歌もあまりぞ多かる。

夜ふけてくれば處々も見えず。京に入り立ちてうれし。家にいたりて門に入るに。月あかければ。いとよく有樣みゆ。聞きしよりもまさりて。いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も。荒れたるなりけり。中垣こうあれ。一つ家のやうなれば。臨みて預かれるなり。されば たよりごとに。物は絶えず得させたる。今宵かゝる事と。聲高に物も言はせず。いとはつらく見ゆれど。志をばせんとす。

さて池めいて凹まり水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年の内に千年や過ぎにけん。片枝は無くなりにけり。今おひたるぞ交じれる。大かた皆あれにたれば。あはれとぞ人々いふ。（土佐日記）

月日の數　　作者しらず

かゝるほどに。むすめ十五歳なる年の二月に。にはかに母かくれぬ。うれを嘆くほどに。父病つきぬ。

父よわくおぼゆる時に。娘を呼びていふやう。わが有りつる世には。我子に高き交らひもせさせんと思ひつれども。若くては知らぬ國に渡り。この國に歸りきても。おほやけにも叶ひ仕うまつらで程ふれば。貧しくて。我子の行く先のおきてせずなりぬ。天道にまかせ奉る。わが領する庄々はた多かれど。誰かは言ひ分く人あらん。ありとも誰かは言ひまつはし知らせん。たゞし命の後。ましのために。けぢかき寶とならん物を奉らん。とのたまひて。近く呼びよせて。萬の事を言ひて。此屋の乾の隅のかたに。深く一丈ほれる穴あり。うれが上下ほとりには。沈を積みて。この彈く琴の同じさまなること。錦の袋に入れたる一つと。禍の袋に入れたる一つ。錦のはなむ風。禍のをはし風といふ。うの琴。わが子と思さば。ゆめさら〳〵に人に見せ給ふな。たゞうの琴をば。心にも無きものに思ひなして。長き世の寶となし。幸あらば其幸きはめん時。禍

きはまる身ならば。其禍かぎりになりて。命きはまり。また虎狼熊けだものにまじりさすらへて。獸に身を施しつべく覺え。もしは伴の兵に身もあたりぬべく。もしは世の中にいみじき目見給ひぬべからん時に。この琴をばかきならし給へ。もし子あらば。うの子十歳の内に見給はんに。さとくかしこく魂とゝのほり。うゐめい心人にすぐれたらば。うれに預け給へと。遺言しおきて絶に入り給ひぬ。

又同じ頃ほひに。乳母もなくなりぬ。心と身を沈めしほどに。殊に身のとくもなくて。久しくなりにしかば。まして一人の仕人も殘らず。日にしたがひて失せ亡びて。物の心も知らぬ娘一人のこりて。物おそろしく包まし ければ。有るやうにもあらず。隱れ忍びてあめれば。人も無きなめりと思ひて。よろづの往還の人は。屋どもゝこぼち取りつれば。寢殿一つのみ。簀子もなくて。有るほどもなく野のやうになりぬれば。娘はたゞ乳母の使ひける從者の。下屋に曹子してありけるをゞ。呼びて使ひける。

父ぬしの言ひしがごと。處々の莊より持てこぬも。使やりなどしてはたりもてこし時こそ有りしか。かくむげになりぬれば。たゞ預かりの者の喜びにて止みぬ。はかなく打ち使ふ調度なども。親たちのなくなりにける騷ぎに。取り隱してしかば。皆うせはてにけり。

世の中も知らぬ若き心地に。いとあはれに悲しく。春は花をながめ。秋は紅葉をながめて明かし暮らすに。たゞ此女の食はすれば食ひ。食はせねば食はでありり。獨かくれゐるばかりの屏風几帳だつものばかりは。さはいへど廣かりし處のなごりに。無くなりぬと見れど。なほしつらひてあり。

父ぬし物の興あり心にくき處ありし人なれば。家のさまをかしう。面白かりし處なれば。家廣く植木おもしろく。草のさまけしきなど。なべてならず面白きところにて。夏になるまゝに。出で入りつくろふ人なき處なれば。蓬葎さへ生ひ凝りて。人目まれにて。たゞ獨あけくれながむるに。秋にもなりぬれば。木草の色ことになりゆくを見るまゝに。いふか

たなく悲しくて。かくいふ。

わび人は　月日の數ず　知られける
明暮ひとり　空をながめて

など獨ごちてなんながめける。

かくて八月中の十日ばかりに。時の太政大臣御願ありて。加茂に詣で給ひけるを。舞人陪從（まひびとべいじう）いの作法（さはう）なれば。いといかめしうて。この俊蔭の家の前より詣で給ふ。

舞人陪從いかめしう。おまへ數しらず過ぎ給ふを見るとて。こぼれたる蔀のもとに立ちよりて見るに。あうび人みくるまなど過ぎて。立ちおくれて。是も先追ひて。年二十ばかりの男。また十五歲ばかりにて。玉光りかがやくうなゐ子の。御馬ずひ多くて渡り給ふ。うなゐ子は大臣殿の御四郎に當り給ふ。父おとど限なくかなしうし給ひて。片時（かたとき）も御目はなち給はぬ御子なりけり。若子君となん聞えける。

この家の垣ほより。いとめでたく色きよらなる尾花。折れかへり招く。

さきに立ち給へる人。あやしく招く處かなとて。

吹く風の　まねくなるべし　花すゝき
わが呼ぶ人の　袖と見ゆるは

とて渡り給ふ。若子君。

みる人の　招くなるらん　花すゝき
わが袖ずとは　いはぬものから

とて立ちより給ひて。折り給ふに。この女見ゆ。あやしくめでたき人かな。心細げなるすまひするかなと見給ふに。うちあゆみ入るうしろで事もなし。

若子君あはれと見たまへど。ひとり行く道にしあらねば。しひて過ぎ給ひぬ。かくて御社に詣で着き給ひて。神樂を奉り給ふに。若子君ひる見つる人なにならん。いかで見んと思して。暗くて歸り給ふに。獨おくれて皆人わたりはてぬるに。若子君かの家の秋の空しづかなるに。見めぐりて見たまへば。野ら鍛のごと恐ろしげなるものから。心ありし人の急

ぐ事なくて。心に入れて作りし處なれば。木立より始めて水の流れたるさま。草木の姿など。をかしく見どころあり。遂葎の中より秋の花はつかに咲き出でゝ。池の廣きに月おもしろくうつれり。

恐ろしき事おぼえず。面白き處を分け入りて見給ふ。秋風河原風まじりて。早く草村に虫の聲みだれて聞ゆ。月くまなうあはれなり。人の聲きこえず。かゝる處にも住むらん人を思ひやりて。獨言に。

虫だにも　あまた聲せぬ　淺茅生に
　　ひとり住むらん　人をこそ思へ

とて深き草を分け入り給ひて。屋のもとに立ち寄り給へれど。人も見ねず。たゞ薄のみいと面白くて招く。くまなう見ゆれば。なほ近くより給ふ。

東おもての格子一間あげて。琴をみそかに彈く人あり。立ち寄り給へば入りぬ。（空穗物語）

蘆賣る男

作者しらず

津の國の難波のわたりに。家して住む人ありけり。相知りて年頃ありけり。女も男も。いと下衆にはあらざりけれど。年頃わたらひなどもいとわろくなりて。家もこぼれ。使ふ人なども得ある處にいきつゝ。たゞ二人すみわたるほどに。さすがに下衆にもあらねば。人に雇はれも使はれもせず。いとわびしかりけるまゝに。思ひわびて。二人いひけるやう。猶いとかうわびしうては得あらじ。男はかくはかなくていますかめるを見すてゝは。いづちも〳〵得いくまじ。女も男を見すてゝは。いづちかいかんとのみ言ひわたりけるを。男おのれはとてもかくても經なん。女のかく若きほどに。かくてあるなんいと〳〵ほしき。京に上りて宮仕をもせよ。よろしきやうにもならば。我をもとぶらへ。おのれも人のごともならば。必たづねとぶらはんなど。泣く〳〵言ひ契りて。便の人に言ひ附きて。女は京に來にけり。

さしはへいづこともなくて來たれば。此附きてこし人のもとにゐて。いとあはれと思ひやりけり。前に荻すゝきいと多かる處になんありける。

風など吹きぬるに。かの津の國を思ひやりて。いかであらんなど悲しくて。よみける。

ひとりして　いかにせましと　わびつれば
そよともせぬ前の　狹ぞ答ふる

となん獨ごちける。

さてとかう女さすらへて。ある人のやどとなき處に。みやたてたり。さて宮づかへしありくほどに。裝束きよげにし。むつかしき事なども無くてありければ。いと清げに顏かたちもなりにけり。かゝれどかの津の國を片時も忘れず。いとあはれと思ひやりけり。たよりの人に文つけてやりたりければ。さいふ人も聞えずなど。いとはかなく言ひつゝ來けり。わが睦ましう知れる人もなかりければ。心とも得やらず。いとおぼつかなく。いかゞあらんとのみ思ひやりける。

かゝる程に。此宮仕する處の北の方うせ給うて。これかれある人を召し使ひ給ひなどする中に。此人を思ひ給ひけり。思ひ附きて妻になりにけり。思ふ事もなく。めでたげにて居たるに。たゞ人知れず思ふこと一つなんありける。いかにしてあらん。あしうてや有らん。よくてや有らん。わが在りどころも得知らざらん。人をやりて尋ねさせんとすれど。わが男きゝて。うたてあるさまにもこそあれと。念じつゝ有りわたるに。猶いとあはれに覺ゆれば。男に言ひけるやう。津の國といふところのいとをかしげなるに。いかで難波に祓しがてらまからん。と言ひければ。いとよき事。我も諸共にといひければ。そこにはな物し給ひそ。れのれ獨まからんといひて。出で立ちていにけり。

難波に祓して歸りなんとする時に。此わたりに見るべき事なんあるとて。今すこしとやれかくやれと言ひつゝ。此車をやらせつゝ。家のありしわたりを見るに。屋も無し。人も無し。いづかたへいにけんと。悲しう思ひけり。かゝる心ばへにてふりはへ來たれど。わが睦ましき從者もなし。かゝれば尋ねさすべき方もなし。

いとあはれなれば。車を立てゝながむるに。供の人は日暮れぬべしとて。

御車かへしてんといふに。暫しといふほどに。蘆になひたる男の。かたぬのやうなる姿なる。此車の前よりいきけり。これが顔を見るに。其人といふべくもあらず。いみじきさまなれど。我男に似たり。これを見て能く見まほしさに。此蘆もちたる男呼ばせよ。蘆かはんといはせけり。」さりければ。ようなき物買ひ給ふとは思ひけれど。主の宣ふ事なれば。呼びて買はす。車のもと近く荷なひ寄せさせよ。見んなどいひて。此男をよく見るに。うれなりけり。いとあはれに。かゝる物あきなひて世に經る人。いかならんといひて。泣きければ。供の人は。猶大かたの世をあはれがるとなん思ひける。

かくて此蘆の男に物など食はせよ。物いと多く蘆のあたひに取らせよ。といひければ。すゞろなるものに何か物多く給はんなど。ある人々いひければ。しひても得いひにくゝて。いかで物を取らせんと思ふあひだに。下簾のはざまの明きたるより。此男まもれば。我妻に似たり。あやしさに心を納めて見るに。顔も聲もうれなりけりと思ふに。思ひ合はせて。

わがさまのいといらなくなりにけるを思ひはかるに。いとはしたなくて。蘆も打ち捨てゝ走り逃げにけり。暫しと言はせけれど。人の家に逃げ入りて。寵の後へに屈まり居りけり。

この車より。猶この男たづねてこといひければ。供の人手をあかちて求めさわげり。人うこなる家になん侍るといへば。此男にかく仰事ありて召すなり。何のうちひかせ給ふべきにもあらず。物をこう給はせんとすれ。をさなきものなりといふ時に。硯を乞ひて文を書く。これに。

君なくて　あしかりけりと　思ふにも
いとゞ難波の　浦ゞ住みうき

と書きて封じて。これを御車に奉れといひければ。あやしと思ひて。持て來て奉る。

あけて見るに。悲しきこと物に似ず。よゝとゞ泣きける。さて返しはいかゞしたりけん知らず。車に着たりける衣ぬぎて包みて。文など書き具してやりける。さてなん歸りける。後はいかゞなりにけん知らず。

あしからじ　とてこう人の　別れけめ
なにか難波の　浦はすみうき

（大和物語）

作者しらず

落窪の君

今はむかし。中納言なる人の。娘あまた持たまへるはしき。大君中の君には牢取して。西の對ひんがしの對に。花々として住ませ奉らせ給ふ。三四の君にも裝着せ奉り給はんとて。かしづきそし給ふ。

また時々通ひ給うげるわかんどほり腹の君とて。母もなき御娘はず。北の方こゝろやいかゞはしけん。仕うまつる御達の數にだにはぼさず。寢殿の放出の又一間なる。落窪なるところの二間なるになん。住ませ給うげる。君達とも言はず。御方とはまして言はせ給ふべくもあらず。名を附けんとすれば。さすがに大臣のはぼさん心あるべしと。つゝみ給うて。落窪の君といへと宣へば。人々もさいふ。おとゞも乳兒よりらうたくやおぼしつかずなりにけん。まして北の方の御まゝにて。はかなき事

おほかりけり。

はかゞしき人もなく。乳母も無かりけり。たゞ母のおはしける時より。使ひつけたる童のされたる女ゞ。後見と附けて使ひ給ひける。あはれに思ひかはして。片時はなれず。

されば此君。かたちはかくかしづき給ふ御娘などにも。劣るまじけれど。出で交らふ事もなくて。あるものとも知る人なし。

やう〳〵物思ひ知るまゝに。世の中のあはれに心うき事のみ。思されければ。かくのみゞ打ち嘆く。

日にそへて　うさのみまさる　世の中に
心づくしの　身をいかにせん

といひて。いたう物思ひ知りたるさまにて。大かたの心ざまさとくて。琴なども習はず人あらば。いとよくしつべけれど。誰かは教へん。母君の。六つ七つばかりにておはしけるに。習はしおい給うげるまゝに。箏の琴を世にをかしく彈き給ひければ。むかひばらの三郎ぎみ。十ばかり

なるに。琴こゝろに入りたりとて。これに習はせと北の方のゝたまへば。時々をしふ。

つく〳〵と暇のあるまゝに。物縫ふ事を習ひければ。いとをかしげにひねり縫ひ給ひければ。いとよかめり。異なるかたちなき人は。物まめやかに習ひたるゞよきとて。二人の絮の裝束。いさゝかなる隙なく。かきあひ縫はせ給へば。暫しこゝろ物いうがしかりしか。夜はいも寐ず。いさゝか遲き時は。かばかりの事をだに物うげにし給ふは。何をやくにせんとてならんと。責め給へば。打ち泣きて。いかで猶消え失せぬるわざもがなと嘆く。

三の君に御裝着せ奉り給ひて。やがて藏人の少將にあはせ奉り給うて。いたはり給ふ事かぎりなし。落窪の君まして暇なく。苦しき事まさる。若くめでたき人は。多くかやうのまめわざする人や少なかりけん。あなづりやすくて。いとわびしければ。打ち泣きて縫ふまゝに。

世の中に　いかであらじと　思へども
　かなはぬものは　うき身なりけり

後見といふは。髮長くをかしげなれば。三の君の方に。たゞ召しに召し出づ。うしろみいと本意なく悲しと思ひて。我君に仕うまつらんと思ひてこそ。親しき人の迎ふるにもまからざりつれ。何のよしにか異君取はし奉らん。と泣けば。君。なにか。同じ處に住まんかぎりは同じ事と見てん。衣などの見苦しかりつるに。なか〳〵うれしとなん見る。と宣ふ。げにいたはり給ふ事めでたければ。あはれに心細げにておはするを。もらへならひて。いと心ぐるしければ。常に入り居れば。さいなむ事かぎりなし。落窪の君の。これをさへ呼びこめ給ふと。腹だゝれ給へば。心のどかに物語もせず。うしろみといふ名びんなしとて。安濃と附け給ひき。（落窪物語）

初瀨詣

かくて年頃願あるを。いかで初瀨にと思ひ立つを。立たん月にと思ふを。さすがに心にし任せねば。からうじて長月に思ひ立つ。立たん月には大

藤原道綱母

營會の御禊。これより女御代いでたゝるべし。これ過して諸共にやはとあれど。我方の事にしあらねば。忍びて思ひ立ちて。日あしければ。門出ばかり法性寺のほとりにして。曉より出で立ちて。午の時ばかりに。宇治の院に至りつゝ見やれば。木の間より水の面つやゝかにて。いとあはれなる心地す。忍びやかにと思ひて。人あまたも無うて出で立ちたるも。我心の怠にはあれと。我ならぬ人なりせば。いかにのゝりてとおぼゆ。

車さし廻らして幕など引きて。しりなる人ばかりをおろして。川に向ひて簾捲き上げて見れば。網代どもしわたしたり。行きかふ船ども未だ見ざりし事なれば。すべてあはれにをかし。しりの方を見れば。來困じたる下衆ども。あやしげなる柚や梨やなどを。なつかしげに持たりて。食ひなどするもあはれに見ゆ。

割子などものして。船に車かきすゑて急ぎもてゆけば。贄野の池泉川などいひつゝ。鳥ども居などしたるも心にしみて。あはれにをかしう覺ゆるに。忍びやかなれば。よろづにつけて涙もろく覺ゆ。

りの泉川もわたりて。はしでらといふ處に泊りぬ。酉の時ばかりに下りて休みたれば。旅籠どころと思しき方より。切大根柚の汁してあへ、しちひて。まづ出だしたり。かゝる旅だちたるわざどもしたりしこそ。あやもう忘れがたうをかしかりしか。

明くれば河わたりていくに。柴垣しわたしてある家どもを見るに。何れならん加茂物語の家など。思ひ出でゝいとうあはれなる。今日も寺めく處に泊りて。又の日は椿市といふ處に泊る。

又の日霜のいと白きに。詣でもし歸りもするなめり。脛を布の端して引きめぐらしたる者ども。歩きちがひ騒ぐめり。蔀さしあげたる處に宿りて。湯わかしなどする程に見れば。さまゝなる人のいきちがふ。己がじゝは思ふ事こそはあらめと見ゆ。

とばかりあれば。文捧げて來る者あり。うこにとまりて御文といふめり。見れば。昨日今日の程。何事かいと覺束なくなん。人少なにて物しにし。

如何いひしやうに三夜さぶらはんずるか。歸るべからん日聞きて迎へにだにとぞある。返事には。椿市といふ所までは平かになん。かゝるついでに。これよりも深くと思へば。歸らん日をえこそ聞え定めねと書きつ。

そこにて猶三日待ち給ふ事。いと便なしなど定むるを。使聞きて歸りぬれば。それより立ちて行きもて行けば。なでふ事なき道も山深き心ちすれば。いと哀れに。水の聲も例に過ぎ。霧はさしも立ちわたり。木の葉は色々に見えたり。水は石がちなる中より湧きかへり行く。夕日のさしたるさまなどを見るに。涙も留まらず。道は殊にをかしくもあらざりつ。紅葉もまだし。花も皆失せにたり。折れたる薄ばかりぞ見えつる。こゝはいと心ことに見ゆれば。簾巻きあげて下簾おし挾みて見れば。着ならしたるものゝ色にもあらぬやうに見ゆ。薄色なるうすものゝ裳を引きかくれば。こしなど塵ぬてとがれたる。朽葉にあえたる心ちもいとをかしう覺ゆ。かたねどもの。塚鍋など居ゑてをるもいと悲し。下衆ちかなる心ちして。みづから生けりおとりしてぞ覺ゆる。

眠りもせられず。忙はしからねば。つくゞくと聞けば。目も見えぬ者のいみじげにしもあらぬが。思ひける事どもを。人や聞くらんとも思はず。のゝしり申すを聞くも。哀れにて。唯涙のみぞこぼるゝ。

かくて今暫しもあらばやと思へど。明くればのゝしりて出だし立てつ。かへさは忍ぶれど。こゝかしこあるじまつゝとむれば。物さわがしうて過ぎ行く。三日といふに京につきぬべけれど。いたう暮れぬとて。山城の國久世の御宅といふ所にとまりぬ。いみじうむつかしけれど。夜に入りぬれば。唯明くるを待つ。

まだ暗きより行けば。黒みたるもの乘りてぞ追ひて走らせてくる。やゝ遠くより下りて。ついひざまづきたり。見れば隨身なりけり。何ぞとこれかれ問へば。昨日の酉の時ばかりに。宇治の院におはしまし着きて。歸らせ給ひぬやと參れと。仰せごと侍りつればなんといふ。

さきなる男ども舟とう流せやなど行ふ。宇治の河原によるほど。霧は來

し方見わず立ち渡りて。いとおぼつかなし。車かきおろして。こちたくとかくするほどに。人聲多くて。御車おろし立てよとのゝしる。霧の下より例の網代も見えたり。いふ方なくをかし。みづからはあなたにあるなるべし。まづ書きて出だす。

人心　宇治の網代に　たまさかに
　　よる氷魚だにも　たづねけるかな

舟の岸によするほどに返し。

歸る日を　心のうちに　數へつゝ
　　誰によりてか　網代をもとふ

見るほどに車はかきすゑて。のゝしりてさし渡す。

いとやんごとなきにはあらねど。卑しからぬ家の子ども。何のゞうの君などいふものども。ながえ鴛の尾の中に入りこみて。かのあじろ僅かに見えて。霧所々に晴れ行く。あなたの岸に家の子衛府の佐などかいつれて見おこせたり。中に立てる人も。旅だちて狩衣なり。

岸のいと高き所に舟を寄せて。わりなうたどりあげに荷ひあゞ。輦をいたしきに引きかけて立てたり。としみの設けありければ。とかうものするほどに川のあなたには按察使の大納言のちうじ給ふ所ありけり。この頃の網代御覽ずとて。こゝになんものし給ふといふ人あれば。かうてありと聞き給へちんを。まうでこそすべかりけれなど定むるほどに。紅葉のいとをかしき枝に。雉子氷魚などをつけて。かうものし給ふと聞きて。諸共にと思ふも怪しう。ものなき日にこそあれとあり。

御かへり。こゝにおはしましけるを。只今さぶらひかしこまりはなどゝいひて。單ぬぎてかづく。さながらさし渡りぬめり。又鯉鱸などしきりにあめり。あるすきものども。醉ひあつまりて。いみじかりつるものかな。御車のつぎの板のほどの。日にあたりて見えつるはともいふめり。車の後の方に。花紅葉などやさしたりけん。家の子と思しき人。近う花咲き實なるまでなりにける日頃よといふなれば。しりなる人もとかくいちへなどするほどに。あなたへ舟にて皆さしわたる。論なう醉はんもの

ずとて皆酒飲む者どもを撰りて率て渡る。川の方に車むかへ。棚立てさせて。二舟にて漕ぎ渡るまで。醉ひ惑ひて。歌ひかへるまゝに。御車かけよ〳〵とのゝしれば。困じていとわびしきに。いと苦しうて來ぬ。あくれば御禊のいそぎ近くなりぬ。こゝに志給ふべき事それ〳〵とあれば。いかゞはとてまた騷ぐ。儀式の車に引きつゞき來たり。下仕手振などかへしいけば。いろふしに出でたらん心ちして。今めかし。（蜻蛉日記）

第三十二章　韻文の作例

其一　短歌および旋頭歌

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひぢて　むすびし水の　氷れるを
　春たつ今日の　風や解くらん

寛平の御時后の宮の歌合の歌　源當純

谷風に　とくる氷の　ひまごとに
　打ち出づる波や　春の初花

題しらず　よみ人しらず

野邊ちかく　家居しをれば　うぐひすの
　鳴くなるこゑは　朝な〳〵聞く

み山には　松の雪だに　消えなくに
　みやこは野邊の　若菜つみけり

寛平の御時后の宮の歌合によめる　源宗于

ときはなる　松の緑も　春くれば
　今一しほの　色まさりけり

梅の花を折りて人に贈りける　紀友則

君ならで　誰にか見せん　梅のはな

色をも香をも　知る人ぞ知る

渚の院にて櫻を見てよめる　在原業平

世の中に　絶えてさくらの　なかりせば
　春のこころは　のどけからまし

花盛に京を見やりてよめる　素性法師

見わたせば　柳さくらを　こきまぜて
　みやこぞ春の　にしきなりける

櫻の花のさけりけるを。見にまうで來ける人によみておくりける　凡河内躬恒

わが宿の　花見がてらに　くる人は
　ちりなん後ぞ　戀しかるべき

題しらず　大友黑主

春雨の　降るはなみだか　さくら花
　散るを惜しまぬ　人しなければ

彌生のつごもりがたに山を越えけるに。山川より花の流れけるをよめる　文屋深養父

花ちれる　水のまにまに　とめくれば
　山にも春は　なくなりにけり

卯月に咲ける櫻を見てよめる　紀利貞

あはれてふ　言をあまたに　やらじとや
　春におくれて　ひとり咲くらん

音羽山を越へける時に。時鳥の鳴くを聞きてよめる　紀友則

おとは山　今朝こえくれば　ほとゝぎす
　こずゑはるかに　今ぞなくなる

寛平の御時后の宮の歌合の歌

紀貫之

夏の夜の　伏すかとすれば　ほとゝぎす
　なく一聲に　あくるしのゝめ

よみ人しらず

題しらず

わがせこが　衣のすそを　吹きかへし
　うらめづらしき　秋のはつ風

昨日こそ　早苗とりしか　いつのまに
　稲葉そよぎて　秋風の吹く

白雲に　羽根うちかはし　飛ぶ雁の
　數さへ見ゆる　秋の夜の月

萩が花　ちるらん小野の　露霜に
　ぬれてをゆかん　さよはふくとも

みどりなる　一つ草とぞ　春は見し
　秋はいろ〳〵の　花にぞありける

在原元方

初雁をよめる

待つ人に　あらぬものから　初雁の
　けさ鳴く聲の　めづらしきかな

寛平の御時后の宮の歌合の歌

大江千里

うゑし時　花まちどほに　ありし菊
　うつろふ秋に　あはんとや見し

長月のつごもりの日大井にてよめる

紀貫之

夕月夜　をぐらの山に　鳴く鹿の
　こゑのうちにや　秋は暮るらん

同じつごもりの日よめる

凡河内躬恒

道知らば　たづねもゆかん　もみち葉を

ぬさを手向けて、秋はいにけり

よみ人しらず

題しらず

今よりは　つぎて降らなん　我宿の
すゝき押しなみ　ふれる白雪

寛平の御時后の宮の歌合の歌

壬生忠岑

みよしのゝ　山の白雪　ふみわけて、
入りにし人の　音づれもせぬ

よみ人しらず

雪ふりて　年のくれぬる　時にこそ
つひにもみぢぬ　松も見えけれ

よみ人しらず

題しらず

わが君は　千代に八千に　さゞれ石の
いはほとなりて　苔のむすまで

仁和の帝のみこにおはしましける時に。御おばの八十の賀に。しろがねを杖に作れりけるを見て。かの御おばにかはりてよめる

僧正遍昭

ちはやぶる　神のきりけん　つくからに
千とせの坂も　越えぬべらなり

よみ人しらず

題しらず

すがる鳴く　秋の萩原　朝たちて
旅ゆく人を　いつとか待たん

小野の千古が陸奥の介にまかりける時に。母のよめる

たらちねの　おやの守りと　あひそふる
心ばかりは　關なとゞめそ

よみ人しらず

題しらず

都いで〻　今日みかの原　いづみ川
　　川風さむし　ころも鹿脊山

朱雀院の奈良におはしましける時に。手向山にてよめる　素性法師

たむけには　つゞりの袖も　きるべきに
　紅葉にあける　神やかへさん

題しらず　紀貫之

よしの川　岩波たかく　行くみづの
　はやくゞ人を　思ひそめてし

れとは山　音に聞きつゝ　逢坂の
　關のこなたに　年を經るかな　在原元方

月がけに　我身をかふる　ものならば
　つれなき人も　あはれと思はん　壬生忠岑

かきくらす　心の闇に　まどひにき
　ゆめうつゝとは　世人さだめよ　在原業平

わが宿は　道もなきまで　あれにけり
　つれなき人を　待つとせしまに　僧正遍昭

色みえで　うつろふものは　世の中の
　人のこゝろの　花にゞありける　小野小町

ちはやぶる　加茂のやしろの　木綿だすき
　ひと日も君を　かけぬ日はなし　よみ人しらず

行く水に　數かくよりも　はかなきは

われもはぬ人を　われもふなりけり
よるべなみ　身をこそ遠く　隔てつれ
こゝろは君が　影となりにき
うば玉の　暗のうつゝは　さだかなる
夢にいくらも　まさらざりけり
風ふけば　波うつ岸の　松なれや
ねにあらはれて　なきぬべらなり
みちのくの　淺香の沼の　花がつみ
かつ見る人に　戀ひやわたらん
月夜よし　夜よしと人に　告げやらば
こてふに似たり　待たずしもあらず
天の原　ふみとどろかし　鳴る神も
思ふなかをば　避くるものかは
いつはりの　無き世なりせば　いかばかり

人の言の葉　うれしからまし
うこひなき　淵やはさわぐ　山川の
あさき瀬にこそ　あだ波は立て
かたみこそ　今はあたなれ　これなくは
忘るゝことも　あらましものを
流れては　妹脊の山の　中におつる
よしのゝ川の　よしや世の中

深草の帝の御國忌の日よめる　文屋康秀

草ふかき　霞の谷に　かげかくし
照る日のくれし　けふにやはあらぬ

深草の帝の御時に。藏人の頭にて夜晝なれ仕うまつりける。諒闇になりにければ。更に世にる交じらずして。比叡の山にのぼ

りて頭おろしてけり。その又の年。皆人御服ぬぎて。あるひはかうぶり賜はりなど。歡びけるを聞きてよめる　僧正遍昭

みな人は　花のころもに　なりぬなり　苔のたもとよ　かわきだにせよ

河原の左の大いまうち君の身まかりて後。かの家にまかりてありけるに。鹽釜といふところの樣を作れりけるを見て。よめる　紀貫之

君まさで　烟たえにし　鹽釜の　うらさびしくも　見えわたるかな

病してよわくなりにける時よめる　在原業平

つひにゆく　道とはかねて　聞きしかど　きのふけふとは　思はざりしを

よみ人しらず

題しらず

いにしへの　野中の清水　ぬるけれど　もとの心を　知る人ぞ汲む

今こそあれ　我もむかしは　男山　さかゆく時も　ありこしものを

なには潟　汐みちくらし　海士ごろも　たみのゝ島に　たづなきわたる

龍門にまうでゝ。瀧のもとにてよめる　伊勢

裁ち縫はぬ　衣きし人も　なきものを　なに山姫の　布さらすらん

文屋の康秀が。參河の椽になりて。縣見に　はえいでたゝじやと。いひやれりける返事

によめる　小野小町

わびぬれば　身を浮草の　ねをたえて
　さそふ水あらば　いなんとぞ思ふ

田村の御時に。事にあたりて。津の國の須磨といふとこころに籠り侍りけるに。宮の內に侍りける人につかはしける　在原行平

わくらはに　問ふ人あらば　須磨の浦に
　もしほたれつゝ　わぶと答へよ

家を賣りてよめる　伊勢

あすか川　淵にもあらぬ　我やども
　瀬にかはりゆく　ものにぞありける

題しらず　素性法師

山ぶきの　花色ごろも　ぬしや誰
　問へど答へず　口なしにして

いくばくの　田を作ればか　時鳥
　しでの田長を　朝な〳〵呼ぶ　藤原敏行

寬平の御時后の宮の歌合の歌　在原棟梁

秋風に　ほころびぬらし　藤袴
　つゞりさせてふ　きり〴〵す鳴く

題しらず（旋頭歌）　よみ人しらず

初瀨川　ふる川のべに　ふたもとある杉
　年をへて　又もあひみん　ふたもとある杉

題しらず（旋頭歌）　紀貫之

君がさす　三笠の山の　もみぢ葉の色
　神無月　時雨のあめの　染むるなりけり

題しらず

わがせこに　見せんと思ひし　梅の花
　うれとも見ねず　雪の降れるば

月の面白かりける夜。花を見て　源信明

あたら夜の　月と花とを　同じくは
　こゝろ知れらん　人に見せばや

我うでに　露ぞれくなる　天の川
　雲のしがらみ　波や越すらん　よみ人しらず

八月十五夜　藤原雅正

いつとても　月みぬ秋は　なきものを
　わきて今宵の　めづらしきかな

（以上六十六首古今和歌集）

よみ人しらず

題しらず

をみなへし　花のさかりに　秋風の
　吹く夕ぐれを　誰にかたらん

もみぢ葉の　流るゝ秋は　川ごとに
　にしき洗ふと　人や見るらん

よるならば　月とぞ見まし　我宿の
　庭しろたへに　ふりつもる雪　よみ人も

外吏にしば〳〵まかりありきて。殿上おりて侍りける時。兼輔朝臣のもとにおくり侍りける　平中興

世と共に　峰へふもとへ　れりのぼり
　ゆく雲の身は　我にぞありける

太政大臣の左大將にて。相撲のかへりあるじし侍りける日。中將にてまかりて。事を

はりてこれかれまかりあがれけるに。やんごとなき人二三人とゞめて。まろうどあるじ酒あまたゝびの後。酔にのりて子どもの上など申しけるついでに　藤原兼輔

人のおやの　心はやみに　あらねども
　子を思ふ道に　まどひぬるかな

淡路のまつりごと人の任はてゝ。のぼりまうで來ての頃。兼輔の朝臣の粟田の家にて　凡河内躬恒

引き植ゑし　人はうべこそ　老いにけれ
　松のこだかく　なりにけるかな

伏見といふ處にて。うの心をこれかれよみける　よみ人しらず

菅原や　伏見のくれに　見わたせば
　かすみにまがふ　小初瀬の山

ある處にて。簾の前にかれこれ物語しける を聞きて。内より女の聲にて。あやしく物のあはれ知り顔なる翁かなと。いふを聞きて　紀貫之

あはれてふ　言にしるしは　なけれども
　いはではにこう　あらぬものなれ

左大臣の家にて。かれこれ題を探りて歌よみけるに。露といふ文字を得て　藤原忠國

我ならぬ　草葉も物は　おもひけり
　袖よりほかに　おける白つゆ

女八のみこ。元良のみこのために四十の賀し侍りけるに。菊の花をかざしに折りて

よろづ代の　霜にも枯れぬ　白菊を
うしろやすくも　かざしつるかな

藤原伊衡

今上帥のみことと聞えし時。太政大臣の家にわたりおはしまして。歸らせ給ふ御おくりものに。御本たてまつるとて

君がため　祝ふこころの　深ければ
ひじりの御代の　跡ならへとぞ

藤原忠平

御返し

をしへおく　ことたがはずは　ゆくすゑの
道とほくとも　あとはまどはじ

村上天皇

先帝おはしまさで。世の中おもひなげきて

つかはしける

藤原定方

はかなくて　世にふるよりは　山階の
宮の草木と　ならましものを

藤原兼輔

返し

山しなの　宮の草木と　君ならば
われは雫に　ぬるばかりなり

（以上十八首後撰和歌集）

其二　長歌

興福寺僧徒の長歌

嘉祥二年三月庚辰。興福寺の大法師等。天皇寶算の四十に當たせ給ふを賀し奉らんが爲め。聖像四十軀を造り奉り。金剛壽命陀羅尼經四十卷を寫し。即ち四萬八千卷を轉讀し。覓りて更に。天人芥を拾はず。天女石を拂ふを罷め。翻つて御藥を擎げて俱に來りて祗候し。及び浦島子暫く雲漢に昇りて長生を得。吉野女尠かに上天に通じて來り且つ去る。等の像を作り。之に長歌を副へ奉獻す。其長歌の詞に曰く。

日の本の　やまとの國を
草菅を　植ゑ生しつゝ
沖つ波　立つ年のはに
物毎に　滋み榮にて
海上も　色聲かはし
敷き榮に　笑まひ開けて
八千くさに　奇しき事は
日の宮の　聖の御子ぞ
蹈み歩み　天降りいましゝ
高御座　よろづよ祝ふ
我國の聖の君は
日の宮の　聖の御子の
御世〳〵に　相うけつぎて
なり給ひ　おほましませば
神祖の　少彦名が
國かため　作りけむより
春はあれど　今年の春は
天地の　神もよろこび
梅柳　つねより殊に
鶯も　聲あらためて
茜さし　天照る國の
久方の　天の橋立
大八島　天の日嗣の
四十の　春になりけり
尊くも　れほましますか
天の下に　れほまし〳〵て
君ごとに　現人神と
四方の國　隣の君は

百繼に　繼ぐといふとも
うこゆゑに　神もうづなひ
ます〳〵に　いま我君は
來む世にも　いかに申さむ
出家の人　法のやからを
譬無き　大御めぐみの
家出人　法のやからは
年月を　堰かへ留めて
こひねがひ　禱り申せ
歡びの　春にありけり
萬世に　重ね飾りて
柘の枝の　よし求むれば
聖のみ　しるしはいませ
驗ます　陀羅尼の御法
いかでか　等し〳〵有らむ
佛さへ　うやまひ給ふ
昔にも　れほましまさじ
釋迦の法　弘め給ひて
罪あれど　赦し給ひつ
けに廣く　れほましませば
大御世を　常に惜しむと
過さずて　鎭はむとこう
然れども　世のことわりと
いかにして　君の大御世
榮ねしめ　たてまつらむと
佛こう　願ひ成したべ
うこゆゑに　君を鎭ふに
四十卷を　寫しとゝのへ

まもりなす　聖の御像
四十の師の　悟開けて
まことを致し
こひねがひ　讀み奉り
行へる　是のしわざを
茜刺す　ひねもすがらに
時日經て　思へる時に
世の中の　いすかしわざを
うの中に　大海の　白波咲きて
到り住み　聞き見る人は
故事に　云ひ繼ぎ來る
君の民　浦島の子が
紫の　雲たなびけて
是ず此　常世の國と
四十軀　造りまつりて
行ふ　人を調へて
四萬に　八千卷うへて
飾り祈み　鎮ひ申せり
いかにして　陳べ聞にむと
ぬば玉の　さ夜とほすまで
瀧つ瀬の　堰かへもかねて
添へ飾り　申しず上ぐる
常世島　國成し建てゝ
萬世の　命を延べつ
住の江の　沖に釣せし
天女に　釣られ來りて
時の間に　將て飛びゆきて
語らひて　七日經しから

限なく　命ありしは
三吉野に　有りし熊稻
うの後は　責かざふりて
是もまた　是の島根の
五種の　實の雲は
人の世を　萬世延ぶる
萬世に　君を鎮へり
百種の　葛にことに
萬世に　君を鎮へり
飛び舞ひて　囀り歌ひ
澤の鶴　いのちを長み
滿潮の　絶ゆる時なく
薫修法の　力を廣み
萬世に　大御世なせば
此島に　こうありけらし
天女に　來り通ひて
領巾衣　着て飛びにきと云ふ
人にこう　有りきといふなれ
大悲者の　千種の御手の
一種を　こゝに飾りて
磯上の　緑の松は
藤の花　開き榮にて
鶯は　枝に遊びて
萬世に　君をいはへり
濱に出でゝ　歡び舞ひて
萬世に　君をいはへり
大悲者の　護を厚み
八十里なす　城に芥子拾ふ

天人は　手うだきて　拾はずなりぬ　八百里なす　岩が根に
領巾衣　裾垂れ飛ばし　拂ふ人　拂はずなりて
大君の　詔の法の　樂を　捧げ持ち　來り侯ふ
此くのごと　鎮へる事は　事ごとに　をちなけれども
物ごとに　歎にあらねど　旅人に　宿春日なる
山階の　佛聖の　たてまつり　給ふなり
大御世を　萬代いのり　佛にも　神にも
申し上ぐる　事の詞は　此國の　本つことばに
逐ひ倚りて　唐の　詞を假らず　書き記す　博士雇はず
此國の　言ひ傳ふらく　日の本の　倭の國は
言靈の　幸ふ國とぞ　古語に　流れ來れる
神語に　傳へ來れる　傳へ來し　事のまに〳〵
本の世の　事たづぬれば　歌語に　詠みかへして
神事に　用ひ來れり　皇事に　用ひ來れり

本の世に　依りしたがひて　佛にも　神にも
舉げ陳べて　禱りし　誠は　ねもころと　聞しめしてむ
みどり子の　をさな言葉に　折箸の　本末しらに
亂糸の　みだれてあれど　九重の　御垣のもとに
常世雁　ひきぬ連ねて　小牡鹿の　膝折り返し
さもらひ　聞ねぐ申す　いかに聞ねむ
汗流し　れぢかしこまる　いかに聞ねむ

（續日本後紀）

ふるうた奉りし時の目錄の其長歌

紀貫之

ちはやぶる　神の御代より　吳竹の　世々にも絶ねず
天彦の　れとはの山の　春がすみ　思ひ亂れて
五月雨の　空もとぶろに　さよふけて　山ほとゝぎす
鳴く毎に　誰も寐ざめて　唐にしき　立田の山の

もみぢ葉を　見てのみ忍ぶ　神無月　しぐれ〳〵て
冬の夜の　庭もはだれに　ふる雪の　猶きえかへり
年ごとに　時につけつゝ　あはれてふ　事をいひつゝ
君をのみ　千代にと祝ふ　世の人の　思ひ駿河の
富士の嶺の　もゆる思ひも　あかずして　別るゝ涙
藤衣　れるこゝろも　八千種の　言の葉ごとに
すべらぎの　仰せかしこみ　卷々の　中につくずと
伊勢の海の　浦の汐貝　拾ひ集め　取れりとすれど
玉の緒の　みじかき心　思ひあへず　なほ新玉の
年を經て　大宮にのみ　久かたの　晝夜わかず
つかふとて　顧みもせぬ　わが宿の　忍草れふる
板間あらみ　ふる春雨の　漏りやしぬらん（古今和歌集）

ふる歌に加へて奉れる長歌　壬生忠岑

くれ竹の　世々のふること　なかりせば
伊香保の沼の　いかにして　思ふこゝろを　逃ばへまし
あはれむかしへ　ありきてふ　人麿こうは　うれしけれ
身は下ながら　言の葉を　天つ空まで　聞ゑ上げ
末の世までの　跡となし　今も仰せの　くだれるは
塵に繼げとや　塵の身に　つもれる言を　問はるらん
これを思へば　いにしへも　藥ければ　けだものゝ
雲に吠ねけん　心地して　千々のなさけも　思ほえず
一つ心ぞ　ほこらしき　かくはあれども　照る光
近き術りの　身なりしを　誰かは秋の　くる方に
あざむきいでゝ　御垣より　とのへ守る身の　御垣もり
をさ〳〵しくも　思ほえず　九重（ここのかさね）の　中にては
あらしの風も　聞かざりき　今は野山し　近ければ
春は霞に　たなびかれ　夏は空蟬　なきくらし
秋は時雨に　袖を貸し　冬は霜にぞ　せめらるゝ

かゝるわびしき　身ながらに　つもれる年を　しるせれば
五つの六つに　なりにけり　これに添はれる　私の
老の數さへ　やよければ　身は賤しくて　年高き
ことの苦しさ　かくしつゝ　長柄の橋の　ながらへて
難波の浦に　立つ波の　波の皺にや　ねぼゝれん
さすがに命　をしければ　越の國なる　白山の
頭は白く　なりぬとも　音羽の瀧の　音に聞く
老いず死なずの　藥もが　君が八千代を　若につゝ見ん」
君が代に　あふ坂山の　岩しみづ
こがくれたりと　思ひけるかな　（古今和歌集）

冬の長歌

九河内躬恒

ちはやぶる　神無月とや　今朝よりは
曇りもあへず　うちしぐれ　紅葉とゝもに　故郷の
吉野の山の　山あらしも　さむく日毎に　なりゆけば
玉の緒とけて　こきちらし　霰みだれて　霜こほり
いやかたまれる　庭の面に　むら〳〵見ゆる　冬草の
上に降り敷く　白雪の　つもり〳〵て　あら玉の
年をあまたも　過しつるかな　（古今和歌集）

七條后うせ給ひにける後によみける

伊勢

神つ波　あれのみまさる　宮の内は
年へて住みし　伊勢の海人も　船ながしたる　心地して
よらん方なく　悲しきに　涙のいろの　くれなゐは
我等がなかの　時雨にて　秋のもみぢと　人々は
れのがちり〳〵　別れなば　たのむ蔭なく　なりはてゝ
とまるものとは　花ずゝき　君なき庭に　むれたちて
空をまねかば　初雁の　なきわたりつゝ　よりにこそ見め
（古今和歌集）

世を卯月

藤原道綱母

六月のつごもりがたに。いさゝか物覺ゆる心地するほどに。聞けば帥殿の北の方尼になり給ひにけりと。思はずにもいとあはれに思ひ奉る。西の宮へ流され給ひて三日といふに。かさはらひ燒けにとかば。北の方わが御殿の桃園なるに渡り。て。いみじげにながめ給ふと聞くにも。いみじう悲しく。わが心地のさわやかにもならねば。つく〳〵と臥して思ひ集むる事ゞ。あいなきまで多かるを。書き出だしたればいと見苦しけれど。

あはれ今は　かくいふかひも　なけれども
思ひし事は　春の末　花なん散ると　さわぎしを
あはれ〳〵と　聞きしまに　西のみやまの　鶯は
限の聲を　ふりたてゝ　君がむかしの　愛宕山
さして入りぬと　聞きしかど　人言しげく　ありしかば
道なきことゝ　歎きわび　谷がくれなる　山水の
遂に流るゝと　さわぐまに　世を卯月にも　なりしかば

山ほとゝぎす　立ちかへり　君を忍ぶる　聲たゆず
いづれの里か　鳴かざりし　まして長がめの　五月雨は
浮世のなかに　ふるかぎり　誰がたもとか　たゞならん
絶えずがうるふ　五月さへ　重ねたりつる　衣手は
上下わかず　腐してき　まして乾ひぢに　絞り立てる
あまたの田子は　れのがまゝ　いかばかりかは　うぼちけん
四つに別るゝ　むこ鳥の　れのがちり〳〵　巣ばなれて
わづかにとまる　ずもりにも　何かはかひの　あるべきと
くだけて物を　思ふらん　いへば更なり　九重の
内をのみこう　馴らしけめ　同じ數とや　九國
島二つをば　ながむらん　かつは夢かと　いひながら
あふべき期なく　なりぬとや　君もなげきを　こりつみて
鹽燒く海人と　なりぬらん　舟を流して　いかばかり
うらさびしかる　世の中を　ながめかるらん　行きかへり

かりの別れに　あらばこう　君が常世も　あれざらめ
塵のみ置けば　むなしくて　枕のゆくへ　知らじかし
今はなみだも　水無月の　木陰にわぶる　空蟬も
胸さけてこう　嘆くらめ　ましてや秋の　風ふけば
籬の荻の　なか〳〵に　うよと答へん　折ごとに
いとど目さへや　合はざらめ　夢にも君が　來んを見て
長き夜すがら　鳴く虫の　同じ聲にや　堪へざらん
と思ふこゝろは　大あらき　森の下なる　草のみも
同じくぬるゝと　知るらめや露　（蜻蛉日記）

其三　歌謠

みてぐら

本　よみ人しらず

みてぐらは　わがにはあらず　天にます
豐をか姫の　神のみてぐら　神のみてぐら

末　みてぐらに　ならましものを　皇神の
御手に取られて　なづさはましを　なづさはるべく
（神樂歌）

杖

本　よみ人しらず

この杖は　いづこの杖ぞ　天にます
豐をか姫の　宮の杖なり　神の杖なり

末　逢坂を　けさ越ねくれば　山人の
千年つけとて　切れる杖なり　くれし杖なり
（神樂歌）

ひさご

本　よみ人しらず

大原や　清和井の清水　ひさごもて
　　鳥は鳴くとも　遊びてを汲め　遊びて行かん
末
我門の　板井の清水　里とほみ
　　人し汲まねば　水さびにけり　水草ゐにけり
（神樂歌）
よみ人しらず

薦枕

本
薦枕　高瀬の淀にや
　　誰が贄人ぞ　鳴突きのぼる
　　網れろし　小網さしのぼる　あいぞ
たが贄人ぞ　鳴つきのぼる
末
　　網れろし　さでさしのぼる

天にます　豐をかひめの
　　うの贄人ぞ　鳴つきのぼる
　　網さしれろし　さでさしのぼる　あいぞ
うの贄人ぞ　鳴つきのぼる
　　網れろし　さでさしのぼる
（神樂歌）
よみ人しらず

紀の國

一段
紀の國の　紀の國のや
　　白良の濱に　ましらゝの濱に
　　れりゐる鷗　はれ　うの玉もてこ
二段
風しも　吹いたれば
　　なごりしも　立てれば

水底きりて　はれ　りの玉見ねず

（催馬樂）

此殿の西

一段

よみ人しらず

この殿の　此殿の西の　西の倉垣
春日すら　あはれ　春日すら　はれ

二段

春日すら　ゆけど　ゆけども盡きず
西の倉垣や　にしのくらがきや

（催馬樂）

淺みどり

よみ人しらず

淺緑や　濃い花田
染めかけたりと　見るまでに
玉ひかる　下ひかる

新京朱雀の　しだり柳
前栽　秋萩　なでしこ　まだい田居となる
唐葵　しだり柳

（催馬樂）

石川

一段

よみ人しらず

石川の　高麗人に　辛き悔する
帶を取られて

二段

いかなる　いかなる帶ぞ
花田の帶の　中は絶ねたる

三段

あやるか　かやるか
中は絶ねたるか

（催馬樂）

我家　よみ人しらず

わいへんは　帷帳をも　垂れたるを
　大君きませ　御看に　何よけん　鮑榮螺か　かせよけん　（催馬樂）

第五期　源氏物語時代

第三十三章　概況

第五期の區域——定子中宮——上東門院——才女の輩——藤氏の榮花——泰平後の戰亂

紫式部の源氏物語出でたる一條天皇の頃に起りて。平家西海に亡び源氏鞾府を鎌倉に開くまでを第五期とす。さらでだに春めきわたりし國文學は。いよ〳〵花の色香を戰はせ。女性文學者大に出で〻。貴族社會の綾よ錦よともてはやされしは。此時にあり。

第五期の區域

定子中宮

一條天皇の中宮。御名は定子。殊に文學を好ませ給ひしかば。清少納言の如き才女。うの下に出でたり。いかに其寵遇を辱せしか。枕草子を讀みて之を知るべし。清少納言が或時歌よまざりしかば。中宮。

　元輔が　後といはるゝ　君しもや
　　今宵の歌に　はづれては居る

とよませ給ひしに。少納言。

　うの人の　後といはれぬ　身なりせば
　　今宵の歌は　先ずよまゝし

と答へ申したるを見ずや。君臣うちとけて文學の才を競はせたる世のさま。以て見るべきのみ。

上東門院

定子崩じて彰子代らせ給ふ。御堂關白道長の娘にして。後に上東門院と申すは是なり。文學を好ませ給ふこと定子中宮に讓らず。宮女に紫式部ありて。源氏物語を作り。大文章家の名を天下後世に輝かしたるは。人の知るところ。世に之を稱して。清少納言と共に二才女となせり。

オ女の盟出

なほ是のみならず。赤染衛門の如き。和泉式部の如き。小式部の如き。伊勢の大輔の如き。出羽の辨の如き。小辨の如き。馬の內侍の如き。高內侍の如き。江侍從の如き。新宰相の如き。兵衛の內侍の如き。中將の如き。歌を以て文を以て其名聞ひたる婦人。春野の董よりも多く一時に出でたるは。時のれのづから至りしに因るは勿論なれども。一つは上に中宮女御れはして。直接に間接に奬勵し給ふの致すところならざらめや。

藤氏の榮花

藤原道長一條三條兩帝の間に。政權を握ること三十餘年。娘は三代の皇后となり。男子は皆顯職に列して朝に滿ち。天下また意の如くならざるは無し。わが一族の冥福を祈らんとて法成寺を建つるや。天皇れよび太皇太后。皇太皇后。中宮みな之に臨御す。三后は是れ道長の娘。天皇は即ち其生み奉れる所たり。外戚政治の盛なること。藤原氏驕奢の極まれるとは。實に此時の如きあらず。文學また之を反響せざらんとするも。得ざるなり。

泰平後の戰亂

後冷泉天皇の御宇に前九年の役あり。堀河天皇の御宇に後三年の役あり。後白河天皇の御宇に保元の亂あり。二條天皇の御宇に平治の亂あり。高倉安德

後鳥羽三帝の御宇には源平の合戰あり。春深かりし閨の夢路を驚かして。世は又泰平の謳歌にのみ醉ふべくもあらず。文學の天地。やう〳〵革命を引き起さんとするの兆を示して。此時代を終りしなり。

今この時代の反響としてあらはれたる文學を概言すれば。前期にあつては。作者れの〳〵の自然に任せて。十人十顏の特色を異にし。いはゆる自由放任的の文學なりしが。自由放任の內にもれのづから流行なかるべからず。流行れこれば勢力あるものに支配せらるゝも。止むを得ざる社會の勢なるべし。是ぞ第五期の來れるゆゑんなりける。

れより物の流行は。誰ともなしに人氣の向ひ來つて。之を同時に發せしむる事もあり。誰か一人のしたる事が主となりて。電氣を世人に傳ふる事もあり。そのさま一途ならざれども。大方は既に人氣の向ふところに。勢力ある人が其代表者となりて。流行の雛形を示すにあるなり。

人氣とは何ぞ。時勢に養はれて萬人の嗜好を同じうするところをいふ。時勢とは何ぞ。藤原氏一門の榮花。以て奢侈の風を貴族社會に養成せし如きをい

ふなり。奢侈の風は文弱に流れ。淫靡に傾くを常とす。藤原氏專權の久しき。武を輕んじ遊樂を事とし。貴族社會を擧つて文弱淫靡の弊風に陷らしめしは。歷史上の事實なり。されば之を反響し反射する文學のみ。獨り伴なはざらんと欲するも得んや。麻布まとひたる老翁は前代に尊ばれたれども。今は綾錦に身を飾る青年の時代となり。質素の文は變じて花美の文とならんとす。是れ第五期の至れる原因の一なり。

入內して女御となり中宮となるは。十の八九まで藤原氏の娘なり。うの榮花を朝廷の上に極めて。朝日の昇る勢なれば。然るべき家の娘は我劣らじと之に宮仕せん事を望み。かの女御中宮も。いかで才女名媛を撰び集めて。他に誇らんと競爭し給ふに至る。此に於て歌文に長じ讀書に達したるは進み。重く用ひられで名を擧げたり。紫式部と清少納言との如き。以て見るべし。されば文學また個人の嗜好を滿足せしむるのみに止まらずして。出世の具となり名譽の媒となりぬ。いかでか奮發して互に研磨せざるべき。源氏物語の出でたるも。枕草子の出でたるも。うの結果に外ならずして。流行の一大方針を定めたる勢力者たりしなり。殊に源氏物語の世に廣く愛ではやさるゝと同時に。當時の和文を悉く婦人の口氣に化せしめたるは。又時好の向ふところを見るべきかし。是れ第五期の至れる原因の二なり。

既に文章の大家は婦人より出でたり。文學の權は女流社會に移りたりといはんも經言ならじ。此時に當り男子が女子を歡ばせんとするには。うの嗜好物たる歌文を以てせざるべからず。されば志を通ぜんとするにも歌を贈り。恨を述べんとするにも文を寄せつゝ。花に月に雨に雪に。贈れば返しするの習にて。男女交際上の舟筏に之を利用し。風儀を亂すの具となるにも心づかざりしさまなり。是れ第五期の至れる原因の三なり。

かくの如くにして第五期の春風は春水と共に一時に來れり。當時の嗜好を代表する源氏物語は成れり。質素なる古體を一新して。後人の歡心を買ふべき花美文章の北辰はあらはれたり。奢侈と共に美を盡し裝を凝らしたる言語思想は大に發達せり。發達して藤原關白と共に榮に。藤原皇后と共に隆なりしを知らば。また自由放任的にあらずして。時好のために使役せらるゝに至り

しをも知らん。時好果して天にあるか。はた人にあるか。古歌に曰はずや。紫の一本ゆゑに武藏野の。草は皆がらあはれとぞ見る。と。之に觸るゝ草の色まで染めなしたりし式部の筆は。萬世をれほひて香り滿ちたるものなりき。婉麗緻密の筆力を。當時流行の漢文の上に馳せしめたるものなりき。漢文の外に名文ある事を忘れたりし男子の醉夢を呼びさましたるものなりき。あゝ當時の文學は之によつて一變し。之によつて大成し。つひには更に源氏崇拜の文學をさへ形づくるに至らしめたり。

第三十四章　散文の盛運

源氏物語――狹衣――住吉物語――とりかへばや物語――濱松中納言物語――其他の古物語――唐物語――今昔物語――宇治拾遺――日記紀行の文――和泉式部日記――紫式部日記――更科日記――讃岐典侍日記――枕草子――菊息文

時勢に伴なはれて大小文學の盛運に達せし概略は。前の章に之を述べたり。請ふ其最大勢力者たりし源氏物語の事より語らしめよ。

村上天皇の十の宮に。選子內親王と申すがれはしましき。うの御方より上東門院に御消息ありて。めづらしき物語は侍らずやと。仰せこされしかば。門院やがて宮女の紫式部に作りて奉れとの仰あり。式部うけたまはりて。首尾よく之を成就せんとの祈願を掛け。石山寺に通夜せしに。折しも八月十五夜の明月湖水にうつりて。物語の風情こゝろに浮びしかば。佛前なりし大般若經の料紙に。先づ須磨明石の卷を起稿せり。これ此物語の成れる故よしなりと。世には傳へたり。

然れども本居宣長は此說を破りて。かの石山に籠れるをりしも。八月十五夜の月。湖にうつりて心のすみわたりけるまゝに。物語の風情の心に浮びければ。まづ須磨の卷に。今宵は十五夜なりけりとおぼしいでゝ侍り。といへるなども。いとうけられず。もし今宵は十五夜なりとあるをもて。十五夜に書きたる證とせば。初音の卷に。今日は子の日なりけりとあるなどをも。正月の子の日に書きたりとせんか。いとも稚なき事なり。と。さはいへど彼說いと古くより聞ねて。事實として有り得まじき事にもあらねば。一概に抹殺す

るにも及ばじ。

一部の趣意は。光源氏の君を主人公とせる謂はゆる人情小説なり。寓意のこもるところ。或は當時禁中の隱微なる惡風俗を諷するに在るが如く。或は學者ぶりして品行修まらざる不德女子を戒むるに在るが如く。或は貴賤老少共に免かれがたき盛者必衰の理を説くに在るが如し。全部五十四帖。卷毎に名あり。左の如し。

桐壺　帚木　空蟬　夕顔　若紫　末摘花
紅葉賀　花宴　葵　少女　花散里　須磨
明石　澪標　蓬生　關屋　絵合　松風
薄雲　朝顔　乙女　玉葛　初音　胡蝶
螢　常夏　篝火　野分　御幸　藤袴
槇柱　梅枝　藤裏葉　若菜上　若菜下　柏木
横笛　鈴虫　夕霧　御法　幻　雲隱
匂宮　紅梅　竹川　橋姫　椎本　總角
早蕨　宿木　東屋　浮船　蜻蛉　手習
夢浮橋

（若菜上下は一帖として數ふ）

橋姫以下を別に宇治十帖といふ。源氏の君の子息薫大將を主人公とせし物語なり。

さても此物語の當時にすぐれたりしのみならで。萬世の後に赫奕たる光彩をかゞやかしたるものは。他なし筆づかひの婉曲にして緻密なると。結構用意の周到なるとにあり。今りの非凡なる點として稱贊を受けたる條々を摘記すれば。先づ光源氏一代の事を記せるに。りの北の方紫の上を亡なひて。人間の愁傷を述べ盡したれば。光源氏の薨去をば重複を避けんが爲め文外に讓り。雲隱といふ卷の名のみを殘して筆を省きたる。是れ一つ。

次に子息薫大將の傳記を起したるに。是は父君の色めき多情なりしとは反對にて。打ち沈み着實なる性質に作り出だし。りの未來に希望ふかき物語の半にて筆を止め。夢の浮橋もて餘韻嫋々と收めたる。是れ二つ。

處々に初めは何とも誰とも判じ難き物語を書き起し。讀みゆく内におのづか

らさてはと知らるゝもあり。ほのかに思ひ當てらるゝもありて。結局を待たしむるやうに記したる。是れ三つ。

卷中の人物に其實名あるは。惟光良清など數人に過ぎず。その他は名もなき人々なるに。おのづから甲と乙との混雜せぬやうに書き分けたる。是れ四つ。

あはれなる物語の後には。滑稽めきたる事を挾み。愛すべき人の相手とは憎むべき人を交へなど。さしもの長文章も讀者を倦ましめざるやうにと構へたる。是れ五つ。

一人の口より出でたる長話を記すところの如きは。切間々々に耳傾け居る聽聞者の容體。又は其評し合ふ言葉などを挾み入れて。讀者をしていつしか玉樓金殿の窓のもとに。物語聞き居る思を感ぜしむる。是れ六つ。

卷に縱横といふ事ありて。或は編年體の如く年月の順序もて物語の筋を記せるあり。或は列傳體の如く其一人の上に立ちかへりて記せるあり。その脈少しも亂れずして。離合の妙いふばかりなし。是れ八つ。

本居宣長曰く。此物語。源氏の君をはじめて。よき人としたる人の上の事は。何事もめでたきさまにほめたるに。そのよみ給へる歌のみは。ほめたる所一つもなくして。其人の他事のよきに合はせては。歌は惡しきやうにいへる事のみ。ところ〳〵に見ゆる。その此物語の中の人々の歌は。みな紫式部みづからよめるなれば。ほむれば我ほめになる故なり。桐壺の卷に。あらき風云々。などやうにみだりがはしきを。心をさめざりける程と。御らんじゆるすべし。夕顏の卷に。さきの世の云々。かやうの筋なども。さるは心もとなかめり。心もとなしとは歌よむ事なども。はか〳〵しからぬよしなり。云々。と。是また婦人の作として謙遜の心もちひ深きを見るに足らん。その九つにや加ふべき。

此物語一たび世に出でしより。他のものを壓倒して獨舞臺を占めたるも故なからずやは。さればこそ近古以來。之を紹介註釋する書すこぶる多く。ほとんど和文の模範とすべき隨一の寶典とも仰がるゝに至りしなれ。素寂法師の紫明抄(正應の頃)。四辻善成の河海抄(永和の頃)。藤原長親の仙源抄(弘和の頃)。一條兼良の花鳥餘情(應仁の頃)。牡丹花肖柏の弄花抄(文明の頃)。西三條實澄の

明星抄（永正の頃）。九條植通の孟津抄（天正の頃）。中院通勝の岷江入楚（慶長の頃）。能登永閑の萬水一露（承應の頃）。熊澤蕃山の源氏外傳（享保の頃）。北村季吟の湖月抄（延寶の頃）。契冲阿闍梨の源註拾遺（元祿の頃）。安藤爲章の紫女七論（同上）。加茂眞淵の源氏物語新釋（寶曆の頃）。本居宣長の玉の小櫛（寛政の頃）。萩原廣道の源氏物語評釋（嘉永の頃）。殊に後進を導きて餘ある燈火の光といふべきなり。

狹衣

此物語あらはれて後。まづ其筆に擬して反射の光をかゞやかしたるは。狹衣なり。狹衣は紫式部の娘大武三位の作にして。狹衣大將を正主人公とし。源氏の君なる女を副主人公とせり。筆力やゝ柔きに失して。源氏ほどは世人に重んぜられざりしを憾む。

これより次々に。住吉物語。とりかへばや物語。濱松中納言物語など。出でて美しき花は文の林に咲き競へり。

住吉物語

住吉物語は。中納言なりし人の娘。繼母に憎まれて攝津の住吉にさすらひ住みけるが。後つひに世に出でゝ富み榮ゆる事を作れるもの。とりかへばや物語は。權大納言なりし人の北の方二人ありて。甲は男子を生み乙は女子を生めりしが。生長するまゝに。男子は女らしくして頻に物恥をし。女子は男らしくして小弓など引き遊ぶを事とす。父常にこれを憂へて。男女たがひに取り替へばやと思さるゝよしを作れるもの。濱松中納言物語は。中納言なりし人もろこしに渡りて。うの國の后に語らひつき。遂に子を生ませて歸朝せしさまを作れるもの。共に作者は詳ならず。

濱松中納言物語

其他の古物語

これらの外に其名聞えたる物語。殿うつり。月待つ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。埋木。道心すゝむる松が枝。こまの。朝倉。ねざめ。井手中將。蘆火たく屋。伏籠の少將。みづから悔ゆる物語。など多かりし事は古書に見ゆれど。世に傳はらざるを如何せん。

唐物語

實に第五期文學の代表者は物語なりき。美文中の美文として當時に愛讀せられしは物語なりき。或は此時代を名づけて單に物語時代といはんも。誣言なるまじとこゝろ思はるゝなれ。

かく盛なりし結果として。唐土の物語を譯し寫したるものさへ出で來ぬ。唐

今昔物語

宇治拾遺

物語これなり。是も作者を知らず。聞き集め見集めたるがまゝに。おもしろく記し傳へたる作も出でたり。宇治大納言隆國の今昔物語（一名宇治大納言物語。宇治拾遺物語の如き是なり。宇治拾遺の序に曰く。世に宇治大納言物語といふものあり。此大納言は隆國といふ人なり。西宮殿の孫俊賢大納言の二男なり。年高うなりては暑をわびて暇を申して。五月より八月までは。平等院一切經藏の南の山際に。南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞こえけり。髻を結ひ分けてをかしげなる姿にて。莚を板に敷きて涼み居侍りて。大いなる團扇をもて扇がせなどして。往來のもの高き賤しきをいはず呼び集め。昔物語をせさせて。我は内に添ひ伏して。語るに從ひて大きなる草子に書かれけり。天竺の事もあり。大唐の事もあり。日本の事もあり。それが内に尊き事もあり。哀れなる事もあり。さまざまやうなり。世の人興じ見る。十五帖なり。その正本は傳はりて。侍從俊貞といひし人の許にぞありける。いかになりてけるか。後に賢しき人々書き入れたる間。物語多くなれり。大納言より後の事書き入れたる本もあるにこそ。

日記紀行の文

さるほどに。今の世に又物語書き入れたる出で來れり。大納言の物語に洩れたるを拾ひ集め。又其後の事など書き集めたるなるべし。名を宇治拾遺の物語といふ。宇治に殘れるを拾ふとつけたるにや。又侍從を拾遺といへば。宇治拾遺物語といへるにや。差別知りがたし。覺束なし。とゝ。以て其書の出で來れる故を知るべし。筆力雄々しく自在にして。流行的女性文章の臭味を帶びず。特色おのづから天眞爛熳のところあり。

日記紀行の文としては。前に和泉式部日記あり。紫式部日記あり。後に更科日記あり。讃岐典侍日記あり。

和泉式部日記

和泉式部日記は。又和泉式部物語ともいふ。作者が冷泉院の皇子敦道親王の寵遇を蒙りたる間の事を。記せるもの。紫式部日記は。作者が上東門院に仕へ奉りし頃の事を記せるもの。更科日記は。菅原孝標の娘の何くれと書きつらねたる日記の中に紀行をも交へ。讃岐典侍日記は。作者が堀河天皇に仕へ奉りし時の日記にして。その崩御および鳥羽天皇御即位のさまを記したるな

紫式部日記

更科日記

讃岐典侍日記

枕草子

り。菫は菫の色を見るべく。菊は菊の香を愛すべし。おの〳〵色香を異にして。或はうつくしく。或はあはれに。とり〴〵なる春秋のけしきを比べ味はんは。物語よりもむしろ其人の寫影ともいふべき自記にこうあれ。

自記の文よく感情を盡し。評語あり。贊辭あり。自負あり。讒悔あり。言はんとすれば筆まづ躍り。記さんとすれば墨すでに舞ひ。いつしか其人と共に語り。其人と共に遊び。其人と共に吟じ。其人と共に笑ふ心地せらるゝは。清少納言の枕草子これのみ。世に之を源氏物語に並べて一雙の美玉と稱するも。うべなりけり。みづから物せる其跋に曰く。物暗うなりて文字も書かれずなりたり。筆も使ひはてゝ之を書きはてばや。此草子は。目に見ぬ思ふ事を。人やは見んずると思ひて。つれ〴〵なる里居のほどに書き集めたるを。あいなく人のためびんいひすぐしなど。しつべき所々もあれば。よう隱したりと思ひしを。心より外にこう泄りいでにけれ。宮の御前に內の大臣の奉り給へりけるを。これに何を書かまし。上の御前には史記といふ書をかゝせ給へる。など宣はせしを。枕にこうはし侍らめと申しゝかば。さは得よとて賜

消息文

はせたりしを。あやしきを古事や何やと。盡せず多かる紙の數を書きつくさんとせしに。いと物おぼえぬ事ゞ多かるや。

大かた是は世の中にをかしき事を。人のめでたしなど思ふべき事。なほ撰りいでゝ。歌などをも木草鳥虫をもいひいだしたらばこそ。思ふほどよりはわろし。心見になりとも識られめ。唯心一つにおのづから思ふ事を。戯れに書きつけたれば。物に立ち交じり。人なみ〳〵なるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに。耻かしきなども見る人は宣ふなれば。いとあやしくゞあるや。げにうれもことわり。人の憎むをもよしといひ。譽むるをも惡しといふは。心の程こうれしはからるれ。唯人に見えけんゞねたきや。と。謙遜に似て却りて識見の高さ。おもふべきなり。一言これを評すれば。かの源氏は讀者をして優なりと言はしめ。この草子は快と呼ばしむるの差あるべきか。

この章を終らんとして。一つ忘るまじきは消息文なり。男子の公用文は多く漢文もてする世の中なれども。男女私用の消息文は。和文の自在に書きこなさるゝ時運に進めるがまに〳〵。優美流調の語氣もて綴らるゝに至れり。源

氏物語に。

今日なん都離れ侍る。又參らずなりぬるなん。あまたの憂にまさりて思う給へられ侍る。よろづ推しはかりて啓し給へ。

また。

唯今の空のけしきをおぼえ知らぬがほならんも。あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊も分きてながめらるゝ頃になん。

などあるを讀まば。當時貴族の間に行はれし日用文のさまは知られなん。而して更に東鑑に載せたる。右大將頼朝の弟範頼におくれる書狀を讀まば。その時世と共に如何に進化し如何に變遷して。今日我等が用ふる書簡の起原をなしたるかを。見るべきものゞ。曰く。

十一月十四日の御ふみ正月六日に到來。今日之より脚力立んとし候ひつる程に此脚力到來。仰遣したる旨委しく承り候終ぬ。筑紫の事などかしたがはざらんところ思ふ事にて候へ。物さわがしからずして能々國に沙汰し給ふべし。構へて〳〵國の者どもに惡まれずしておはすべし。馬の

事誠にさるべき事にてはあれども。平家は常に傾城を伺ふ事にてあれば。もしおのづから道にて押とられなどしたらん事は。聞耳も見苦しき事にて有んずれば。づかはさぬなり。又內藤六が周防のせいを以て志をさまたげ候以の外の事也。當時は國の者の心を破らぬ樣なる事こそ吉事にてあらんずれ。また八島に御座す大やけ並二位殿女房達など。少しもあやまりあしざまなる事なくて迎へ取申させ給ふべし。かくとだにも披露せられば。二位殿などは大やけをぐしまゐらせて。迎へざまにおはする事もあるらん。大方は帝王の御事今に始めぬ事なれども。木曾は山の宮鳥羽の四宮討奉せて冥加つきてうせにき。平家又三條高倉の宮討奉りて箇樣に失んとする事也。さればよく〳〵したゝめて。敵をもらさずして閑に可被沙汰なり。內府は極て臆病におはする人なれば。自害などはよもせられじ。生どりにとりて京へぐして上るべし。扨世のすゑにも言傳へてあらば。今少し吉事なり。返々此大やけの御事ぞぼつかなき事也。いかにも〳〵して事なきやうにさたせさせ給ふべし。大勢どもにも此よし

をよく〳〵仰合られ候べし。穴賢〳〵。

第三十五章　和文體の歴史

物語體歴史の作――大鏡――榮花物語――續世繼――水鏡

上古以來。朝廷にて編纂せられしものにして。正史と立てられしは六種あり。曰く日本紀。曰く續日本紀。曰く日本後紀。曰く續日本後紀。曰く三代實錄。曰く文德實錄。これを總稱して六國史といふ。いづれも漢文の歴史にて心ゆかぬさまなる事は。既にいべり。うれすら文德實錄を最後にして絶に果てたるぞ悲しき。

物語體歴史の作

大鏡

然れども一物ほろぶれば他の物おこりて之に代るは天地の常。和文體の物語的歴史を民間に呼び起したるころ。漢文歴史斷絶の賜物なれ。

まづ大鏡出づ。作者は藤原爲業なりともいへど。詳ならず。文德天皇より後一條天皇までの事を。天皇大臣と分類して列傳體に記し。特に藤原氏の榮花を諷諭的に述ぶるを以て。主眼とせしものゝ如し。作者或る時雲林院の菩提講に詣でしが。講師待つ間のつれ〳〵に。大宅世繼といふ翁より聞き取りたる物語なるよしを記せる自序あり。

榮花物語

これに類似したる作は榮花物語なり。然れども是は編年體にして。之を大鏡に比ぶれば。文かれは强く雄々しく。これは柔かに女々しき差あり。作者を赤染衛門なりとも傳へたれど。此書には寛治六年までの事あれば。衛門の傳に照らし考へて。百二三十歳までもながらへ居りて書きたりとせざれば。時代合はず。されば始は衛門。をはりは爲業かとの說もあれど。詳ならずとして置くを。穩なりとすべし。書中のするところは。宇多天皇より堀河天皇までの御代の事なり。これも御堂關白道長の榮花を記す事に重きを置きたるが爲め。題號ともしたるならん。毎卷名あり。左の如し。

月の宴　花山尋ぬる中納言　さま〳〵のよろこび　見はてぬ夢
浦々の別　かゞやく藤壺　烏邊野　初花　岩蔭　日蔭の鬘
莟花　玉の村菊　ゆふしで　淺緑　うたがひ　本のしづく
音樂　玉の臺　御裳着　御賀　後悔大將　烏の舞

駒くらべの行幸　若ばへ　望月　楚王の夢　衣の玉、　若水
玉のかざり　鶴の林　殿上の花見　歌あはせ
きるはわびしと歎く女房　暮待つ星　蜘蛛のふるまひ　根合
烟の後　松の下枝　布引の瀧　紫野

この書の一名を世繼ともいひ。また大鏡をも世繼の物語といへり。總じて世繼とは。世々繼々の物語の意にて。歴史といふ程の言葉なれば。榮花には此稱を附し。大宅世繼なる翁の語りし心もて。大鏡の方にはしか名づけたるにて。趣いさゝか替はれり。

續世繼

續世繼といふものあり。一名を今鏡といふ。大鏡に續ける意なるべし。後一條天皇より高倉天皇までの御代の物語を。大和の長谷に詣でゝ或る老女より聞き得たるよしに記したり。作者詳ならず。

水鏡

水鏡といふものあり。大鏡の前編たらしめんとて。立ち歸り神武天皇より仁明天皇までの事を記したり。作者は內大臣中山忠親なりき。

かくの如く當時には假名の日本紀とも呼ばれし和文の歴史。つぎ〳〵に出でて。再び外國文に依賴するの愚を學ぶものなきに至りしは。いかに國民の面目として喜ぶべきの甚しきにあらずや。唯あやしむ。文學の盛なるをもて知られし德川時代に至り。國史編纂に志すものが。皆かの日本紀時代を學びて。この大鏡時代を學ばざりしを。

拾遺和歌集

第三十六章　和歌の狀態

拾遺和歌集——後拾遺和歌集——金葉和歌集——詞花和歌集——千載和歌集——私撰歌集——歌合——歌學——歌論——連歌——落首——今樣歌——漢詩思想——佛教思想

和歌の狀態は。前代に比していちじるき變遷を見出だす能はざれども。一言すれば。風調うつくしく。材料豐富に。題目あらたなるを加へゆくは。斯道のため喜ぶべき進歩といふべし。

後撰和歌集の村上天皇の朝に成れる事は既に言へり。之に次ぎて出でたる勅撰歌集を。拾遺和歌集といふ。一條天皇の長德年中。大納言藤原公任の撰びて奉りしもの。或は花山法皇の御撰なりといふ說もあり。鴨長明の無名抄に

曰く。拾遺の頃より其體ことの外ものちかくなりて。理り隈なく顯はれ姿すなほなるをよしとす。と。

後拾遺和歌集

次に後拾遺和歌集出づ。白河天皇の應德年中。中納言藤原通俊の撰びて奉りしもの。難後拾遺などいふ書も出來たる程にて。非難の聲は四方に起りたれど。一種新樣の特色は却りて此非難の內にあるべし。

金葉和歌集

次に金葉和歌集出づ。崇德天皇の天治年中。白河院の院宣を奉じて。前木工頭源俊頼これを撰ず。順德院の八雲御抄に宣はく。後拾遺金葉の頃より。後ざまの歌多く。平懷なる體なれど。拔けてよき歌は又おほし。と。

詞花和歌集

次に詞花和歌集出づ。近衛天皇の天養年中。崇德院の院宣によりて。左京大夫藤原顯輔これを撰ぜり。

千載和歌集

次に千載和歌集出づ。後鳥羽天皇の文治年中。後白河院の院宣によりて。五條三位藤原俊成これを撰ぜり。

以上の五集に。第四期の古今後撰二集と。第六期の新古今和歌集とを加へて。八代集と稱し。後世和歌を學ぶものゝ模範となす。

私撰歌集

之を始として私撰歌集の出でたるも多く。歌合さかんに行はるゝ結果として。

歌合

女郎花合。撫子合。前栽合などの如き。風流の遊も起り。堀河天皇の御宇には。艶書合などいふ遊さへ物せられたり。かの世に名高き堀河太郎百首。堀河次郎百首の如き。月詣集の如き。共に當期の產出品として數へん事を忘るべからず。

歌學

和歌の流行かくまでの熱度に達せり。之を評論し。之を解釋し。之を指導せる書の出づるも。おのづからの順序なるべし。此に於て藤原公任の和歌九品論議。新撰髓腦。藤原道濟の和歌十體。源俊頼の山木髓腦。藤原俊成の古來風體抄。または藤原清輔の奧儀抄。袋草子。和歌初學抄。僧顯昭の袖中抄。藤原基俊の悅目抄など。いはゆる歌學の書のあらはれ來りしなり。此外に濱成式。喜撰式。孫姫式。石見式などいふ類あれど。信ずべきものならねば。

歌論

暫くこゝには言はじ。

この頃までは。折に觸れ事に臨みて思ひ得たるまゝを。自然の言葉もてよみ出でたるが歌なりき。然れども今は言葉も思想も。之を平生に學び之を練磨

連歌

するの必要おこれり。此に於て。題詠といふ事はじまる。其弊は難題を巧によみて。奇に誇るが如き結果を生ぜざるにしも非ざりき。

この歌やう〳〵交際的の要具となりて。一首の歌を二人してよむ連歌も起りぬ。多くは言葉の上か思想の上かに。滑稽の意を含ませて上の句下の句相應ずるを妙とせしなり。上の句よりよみかくるも。下の句よりするもありて。例を示さば。

筑紫の志加の島見て　爲助
つれなく見ゆる　しか（志加と鹿とを兼ぬ）の島かな　國忠

弓張の　月のいる（入ると射ると兼ぬ）にも　驚かで
千早ぶる　かみ（神と紙と上とを兼ぬ）をば足に　卷くものか

（金葉集）

和泉式部加茂に參りけるに。藁鞋足を食はれて
紙を卷きけるを見て　神主忠頼

これをゞ下の　やしろとはいふ　（同上）　和泉式部

垣根にいたちはじかみといふものゝ生ふる　隆源阿闍梨
を見て
垣根には　いたちはじかみ　はえてけり　俊頼

ねず（鼠）もちの木よ　心して咲け　（散木弄歌集）

うも〳〵此連歌の起原は。遠く上古にありて。日本武尊東夷征伐の御歸るさに。甲斐の酒折の宮に着かせ給ひし時。

にひばり　筑波を過ぎて　幾夜か寐つる

と歌詞もて問はせ給ひしに。御供なりける翁。

かがなべて　夜には九夜　日には十日を

と答へ申しつるに始まりとて。後世連歌の事を筑波の道といふ。

うの後伊勢物語にも。

女の方より出だす盃に歌を書きて出だしたり。

取りて見れば。

かち人の　渡れどぬれぬ　江に（縁を兼ね）しあれば

と書きて末は無し。うの盃の裏に。つい松の

炭して末をつく。

また逢坂の　關は越ねなん

など見にて。前期にもかれこれ行はれたるには相違なけれど。一種の體裁を

爲して。撰集に家集に一の部門を占むるに至りしは。此時にあり。後世俳諧

の連歌は。遙にこれよりぞ出でたりける。

落首

また落首といふものあり。俗語俗調ながらも一種の風韵を帶びて。世を諷し

人を譏り。若しくは豫言を爲す諧謔の歌なり。下野守源義朝の斬られて。髑

の木に梟せられし時。

下野は　紀の守（木の上を兼ぬ）にこう　なりにけれ。

善しとも（義朝を兼ぬ見えぬ）　上官かな

また宇治川の合戰に。伊勢の軍勢の水に流るゝを見て。

伊勢武者は　みな緋威（氷魚を兼ぬ）の　鎧きて

宇治の網代に　かゝりけるかな

木曾義仲の滅びける時。

信濃なる　木曾の御料の　蕎麥打つて

九郎（食ふを兼ぬ）判官

たゞ一口に

とよみたるなどを見て。當時の時勢が。いかに斯かる歌體を需要したるかを

知るべし。是れ後世の狂歌の起りとも見るべきか。この歌は其譏らるべき人

の門前などに落し置く意味にて。落首とは名づけたるならん。

今樣歌

さても前期に起りたる今樣歌の成行は如何。今や盛に用ひられて貴族の唱歌

に入り。民間の歌謠となり。白拍子などに歌はれつゝあり。

蓬萊山には　千年ふる　萬歳千秋　かさなれり

松の枝には　鶴すぐひ　巖のうばには　龜あうぶ

（五節間郢曲）

よろづの佛の願よりも　千手の誓ひ　頼もしき
枯れたる木草も　忽に　花さき實なる　ところ聞け
（源平盛衰記）

君をはじめて　見る時は　千代も經ぬべし　姫小松
おまへの池なる　龜岡に　鶴こそ群れゐて　遊ぶなれ
（同上）

漢詩思想

うの歌曲として簡單なる祝言などの意をあらはすのみに止まらず。歌人の感慨を漏らす具とさへなりぬるは。後徳大寺實定の。

ふるき都を　來て見れば　淺茅が原とぞ　荒れにける
月のひかりは　隈なくて　秋風のみぞ　身にはしむ

以て見るべきなり。

あはれ當期の和歌。うの美を極め。富を極め。平地に波瀾を起して。風なき空にも花を濺らすの感あり。而して其前期に比し。こよなく漢詩思想と佛教思想との溶解して入り來れるも。うの境域を廣くせし一つならん。漢詩思想

佛教思想

の良友としては。前に白氏文集あり。後に公任の撰べる和漢朗詠集あり。佛教思想の善師としては。當時の習として在俗の人も。明暮讀誦せし經文これなり。見よや公任のよめる。

こゝに消え　かしこに結ぶ　水の泡の
浮世にめぐる　身にこうありけれ

は維摩經十喩の中の。是身如泡。不得久立。の意にあらずや。

崇德院の御製。

ちかひをば　千ひろの海に　たとふなり
露もたのまば　數に入りなん

は法華經普門品の。弘誓深如海。をよませ給へるにあらずや。

宜秋門院丹後の。

むなしきも　色なるものと　さとればや
春のみうらの　緣なるらん

は心經の。色即是空。空即是色。にあらずや。

佛教と文學と親密なる。かくまでに進めり。文學を擧りて僧徒の手に委ねんとする時期も。近づきぬる樣をやトせまし。

第三十七章　著名の作者

藤原公任（きんたう）

三條太政大臣頼忠の子にて。圓融天皇の御代より。侍從。左近衛權中將。尾張伊豫の權守。藏人頭。備前守。參議。右衛督。檢非違使別當。中納言と次第に進みて。正三位に叙し大納言となる。

學和漢に通じ。殊に歌をよくし。兼ねて能書の名高く。管絃にも達したり。圓融天皇の御時。御堂關白道長の催にて。大井川舟遊の事ありしに。和歌の舟。詩の舟。管絃の舟の三つの舟を浮べて。道長公任に向ひ。足下は多能なるが。何れの舟を撰ぶべきぞと問ふ。公任つひに和歌の舟を撰びて。

朝まだき　あらしの山の　寒ければ
紅葉のにしき　着ぬ人ぞなき

といふ歌をよめり。

他日公任人に語つて曰く。余をして詩の舟に乘り。此歌の如き詩を作らしめば。必ず名を天下にあぐべかりしに。と。

老年の後。最愛の娘を失なひしかば。哀慕に堪へずして官を辭し。大和の長谷の別莊に退隱して剃髮せり。かくて後朱雀天皇の長久二年薨ず。年七十六。世に四條大納言と呼ぶは。うの家京都の四條にありたるを以てなり。撰著の書は。北山鈔。和歌九品論議。新撰髓腦。深窓秘抄。金玉集。和漢朗詠集。などあり。朗詠集は藤原敎通を婿に取りし時。撰びて婚引出におくりしものといふ。又三十六歌撰も公任の撰なり。

子に定頼あり。同じく歌人として世に知らる。

和泉式部（いづみしきぶ）

越前守大江雅致の娘なるが。和泉守橘道貞の妻となりたるをもて。うの夫の官により和泉式部と呼ばれ。又辨の內侍とも呼ばれたり。夫道貞沒せしかば。上東門院に仕へて才女の名あり。後又丹後守藤原保昌に嫁して。任國に下れ

り。

式部佛法に歸依する心深く。播州書寫山の性空上人に贈るとて。法華經中の。

從冥入冥。永不聞佛名。といふ文句を用ひつゝ。

くらきより　くらき道にぞ　入りぬべき
はるかに照らせ　山の端の月

とよみたるは。拾遺和歌集にも入りて。有名の歌なり。後つひに尼になりて。御堂關白より贈られたる小御堂といふ寺に住み。專ら佛道修行にのみ身を委ねたり。和歌和文をよくす。

式部先夫に具せし時。一女を產みて小式部と呼ばれたり。歌よむ事を母に習ひて譽れ高く。召されて上東門院の官女となりぬ。

母の丹後にありし頃。禁中に歌合のあるとて。小式部も作者の數に加はりしが。人或は母の助力を得ずして歌よむに困るならんなど。評しぬたるに。中納言定頼小式部に向ひ。歌はいかゞせさせ給ふ。丹後へは人つかはされけんや。使は來らずや。いかに待遠にればすらん。など戯れたるに。小式部りの袖をひかへつゝ。

大江山　いくのゝ道の　遠ければ
まだふみも見ず　天の橋立

と答へて舌を捲かせし物語あり。

紫式部

堤中納言兼輔の曾孫にて。父を藤原爲時といふ。幼き頃より學才ありて。兄の史記よみならふを傍に聞きぬつゝ。兄より先に覺ゆしかば。父常に嘆息して曰く。之をして女子ならしめし悔しさよと。

右衛門督藤原宣孝の妻となりしに。一條天皇の長保三年夫沒せしかば。節を守りて再び嫁せず。寛弘のはじめより上東門院に仕へたり。かの大文章なる源氏物語は。夫に別れて四五年の間。つれ〴〵と暮らしぬたる頃の作ならんともいひ。又は門院に仕へし後の作ともいふ。後説は既に語れり。

式部は歌文章に秀でたるのみならず。漢學に通じ。佛書に通じ。音樂に通じ。社會百般の事まで明かにて。いはゆる才德兼備の女流たりしに。之を人に誇

らんとする心は露ほどもなく。謙遜謹愼の賢婦なりしは。當時りの比類を見ず。

はじめは藤原氏の娘なるをもて藤式部と呼ばれしが。のち紫式部と改められたるにつき三說あり。其一は藤の花の色のゆかりによりて紫の字に改められしといひ。其二は源氏物語に紫上の事をすぐれてあはれに書きたるによりて。其名を得しといひ。其三は一條天皇御乳母子なるにより。上東門院に奉らしむとて。わがゆかりのものなり。あはれと思召せと申さしめ給ふ故に。ゆかりの色の義にて此名ありとの說なり。其二の說こそ信ずべきに近からめ。女子二人めり。姉は大弐三位。妹は辨の局とて後冷泉天皇の御乳母たり。

赤染衛門

母は平兼盛の妻なりしが。衛門を懷胎せしまゝ離別せられしかば。生みたる子をつれて右衛門尉赤染時用に嫁したり。これよりして赤染衛門と呼ばる。御堂關白の北の方倫子に仕へて歌人の名高く。和泉式部と常に競爭せり。後又上東門院に仕へたりといふ說もあり。

嫁して名儒大江匡衡の妻となる。かつて藤原公任中納言を辭せんとして。表文の草稿を紀齊名大江以言などに賴みしに。皆心にかなはざりしかば。更に匡衡に誂へたり。匡衡諾して家に歸りしが。筆執りかねたる顏色を見て。妻の衛門あやしみつゝ其故を問ふ。匡衡かたるに。齊名以言の能はざるところを。余の書き得んこと覺束なきを以てす。衛門やゝありて曰く。公任卿は門地の高きを人に誇る性質におはせば。祖先の歷々なるに。近年官位停滯して不平甚しきよしを書き給へ。かの卿かならず喜ばれん。と。此に於て匡衡筆を下し。臣は五代の太政大臣の嫡男なり。曩祖忠仁公已來といふより數へ立てゝ。我身の不幸なる事を記しつゞけしかば。公任これを見て大に滿足し。直に之を用ひたり。衛門が才おほかた此くの如し。

夫におくれて尼となりたるは長久二年なりき。子二人あり。男を擧周といひ。女を江侍從といふ。侍從和歌をよくせり。

伊勢大輔

大中臣能宣の孫にて。祭主輔親の娘なり。上東門院に仕へて歌よみの名高く。

のち筑前守高階成順の妻となれり。

清少納言

清原元輔の娘にて。一條天皇の中宮定子に仕へたり。芳名を千載に不朽ならしめしは。枕草子にありき。歌さた凡ならず。

或る時雪の降りけるに。中宮は女官たちに向ひ。香爐峰の雪は如何と。仰せられしかば。清少納言直に立ちて御簾を捲きあげたるにぞ。人々りの才の神速なるを嘆稱せしといふ。是れ白氏文集の。香爐峰雪撥簾看の句を中宮もおぼし出で給ひ。少納言も思ひよりたるなり。此君ありてこそ此臣ありしともいひつべきか。

老後には零落して四國に下りなどせしが。終るところを知らず。阿波の國撫養の港に今も其墓とてあるは。遺骸を收めしところにやあらずや。

大貳三位

名は賢子。左衛門佐藤原宣孝の娘にて。母は紫式部なり。太宰大貳高階成章の妻にて。後一條天皇の御乳母となり。三位に叙せられしかば。大貳三位と

呼ばれたり。

母の遺傳を受けて文才すぐれ。狹衣を作れり。

能因法師

遠江守忠望の子なりしが。養はれて肥前守元愷の子となれり。はじめは橘永愷といひて文章生となり。學を好み和歌を嗜みしが。一日外出して藤原長能の家を過ぎんとす。折しも乘りたる車の輪損ぜしかば。替車取りにやる間に長能を訪ひ。歌よむ心得を尋ねしに。長能曰く。

山ふかみ　落ちてつもれる　もみぢ葉の
かわける上に　時雨ふるなり

かやうによむべし。と。永愷ふかく感じて。是より遂に長能を師として學べり。和歌に師弟といふ事あるは。こゝに始まる。

後剃髮して融因と名づけしが。また能因と改めたり。かくて攝津の古曾部に住みたるを以て。世に古曾部の入道と稱す。毎年花の頃になれば京に出でゝ。相摸が夫公資の家に宿し。其庭の櫻を賞翫せしとぞ。

能因また或る時。藤原兼房と同車して二條東洞院を過ぎけるが。何思ひけん俄に車を下りぬ。兼房何故ぞと問へば。こゝこそ伊勢の御息所の舊跡なるを。禮せずして可ならんやとて。老松の木の見ゆるまで。車に乘らざりき。

歌道に熱心なる此くの如し。

能因ことに帶刀藤原節信と心合ふ友なりしが。りの初對面の時。能因ふところより錦の袋を出だし。是は長柄の橋を作りし時の鎚屑なりとて。開きて見せければ。節信また懷より紙包を出だし。井手の蛙を御覽ぜよとて。蛙の干乾を示したり。

能因一年伊豫に下りしが。早魃うちつゞき民の嘆き一方ならざりしかば。

天の川　苗代水に　せきくだせ
　　世に水分の　神ならば神

とよみて三島明神に奉りしに。冥感たちまちに至り。大雨降ること三日三夜に及びぬといふ。

いつにか有りけん。能因心にふと浮びしは。

都をば　かすみと共に　立ちしかど
　　秋風ぞ吹く　白河の關

の歌なりき。されども其身かの地を踏まずしては感淺からんとて。人には陸奥地方へ旅立せしよしいはしめて。長く家に籠り居つゝ。日にとげざれば誠しからずとて。日毎に顏を窓より出だし。色も黑み月日も程よくなれる頃。歸京せしよし披露して。この歌を世に示したりとの物語あり。前のも後のも和歌に志ふかゝりし故の餘談ともいふべきか。能因きはめて小食なる人なりしよし語り傳へたり。

生年沒年詳ならず。著作には玄々集。八十島の記。歌枕あり。

相摸

また乙侍從とも呼ばる。源頼光の娘なり。相摸守藤原公資の妻となりしかば。此名あり。

順德院の八雲御抄に宣はく。女の歌には赤染衛門。紫式部。相摸。上古に耻ぢぬ歌人なり。と。りの名を一世に聽かせしを知るべし。

菅原孝標の女

後冷泉天皇の天喜頃の人。父は菅原道眞六世の孫にて。右中辨たり。祐子內親王の官女なりしが。のち橘俊通に嫁せり。歌は新古今以後の勅撰にも入り。文は有名なる更科日記を遺したり。

源隆國

大納言俊賢の第二子なり。世に宇治大納言と呼ぼる。白河天皇の承曆元年。七十四歳にて薨じたり。文の事は前に述べたれば。こゝにはいはず。

讃岐典侍

堀河天皇に仕へ奉りし官女なり。傳を知らず。

源經信

權中納言道方の六男なり。別莊を山城の桂の里に有せしかば世に桂大納言と呼ぶ。

幼き時より歌道に志深く。また管絃をよくし。蹴鞠をよくし。學古今に通ぜざるはなし。

承保三年白河院大井川に行幸ありける日。公任の時の例に習ひ。詩歌管絃の三つの舟を浮べしに。經信すこし遲參せしが。舟すでに出でたるを見て。河の汀に跪きつゝ。何れの舟にても寄せ候へとて。遂に管絃の舟に乘り。詩さへ歌さへ奉れり。是より公任と共に三船の才人と稱せらる。

嘉保年中太宰權帥となりて赴任する道に。筑前の蓮田の驛に一宿せし折しも。八月十五夜なりしが。庭に槻の大木ありて月見る障りとなりしかば。直に此木を伐らせ。月前に琵琶を彈じ歌を吟じて一夜を明かしたり。人皆りの風流を感ぜしといふ。

正三位權大納言にて承德元年薨ず。年八十二。二男あり。長は基綱。次は俊頼。共に和歌をよくす。

藤原顯季

春宮大進隆經の第二子なり。大納言實方の養子となりて和歌をよくし。一家の風を立てゝ六條家の祖と仰がる。りの家京都の六條烏丸にありしを以てなり。修理大夫に任じ正三位に叙し。鳥羽天皇の保安二年薨ず。年六十九。

源俊頼（ビヨリ）

權大納言經信の第三子にて。堀河白河鳥羽の三朝に仕へ。官は右近衛少將にて。木工權頭および右京大夫を兼ね。從四位上に叙せられたり。有名の歌人にて殊に一家の新機軸を出だしたれば。當時の競爭者は。或は強ふるに。歌に猥なる事を言ひ散らすなどの罵詈を以てしたれども。識者の眼をば遂に拖ふ能はずして。鍛錬精巧にて疵の指すべきものなしとの。俊成の評語は。後世まで響きわたれり。

崇德天皇の天治年中。勅を奉じて金葉和歌集を撰ぶ。時に藤原基俊。俊頼と名を齊しうして中よからざりしが。基俊人に語つて曰く。俊頼は文才なくして和歌をよくす。たとへば馬のよく道をありくが如しと。俊頼之を聞いて曰く。文時朝綱の如き博識といへども。未だ嘗て和歌の名作ありしを聞かず。躬恒貫之詩に妙なるを知らざれども。和歌の模範として世に仰がるゝに非ずやと。當時此兩家を以て好敵手なりと稱す。而して歌よむ力は俊頼實に基俊の上にあること數等なりき。

嘗て和歌の會に臨みしに。俊頼獨り我歌に署名せざりしかば。講師（朗讀者）あやしみて之を注意す。俊頼たゞ讀み給へと促す。よりて讀みあげゝるに。

卯の花の　皆白髪とも　見ゆるかな
賤が垣根も　としよりにけり

と聞くや人々手を拍ちて感稱せしといふ。

又或時よめる。

世の中は　うき身にうへる　影なれや
思ひすつれど　離れざりけり

の歌を世に傳へて。鏡の宿の遊女ども俊頼の前にて歌ひ興ぜしかば。僧正永縁これを羨ましがりて。琵琶法師をかたらひ。物あまた與へつゝ。

聞くたびに　めづらしければ　時鳥
いつも初音の　心地こそすれ

といふ自分の歌を。處々にて歌はせしといふ奇談あり。

著書には山水髓腦。無名抄。家集に散木弄歌集などあり。

藤原基俊

右大臣俊家の子にて。從五位下左衛門佐たり。崇德天皇の保延四年。八十四歲にして剃髮し。名を覺舜と改む。

既にいへる如く基俊は俊賴の好敵手にして頗る文才に富み。詩歌の達人と呼ばれし大家なれど。惜むべし徒らに古體を好みたると。傲慢人を凌ぐの氣ありしとによりて。四面楚歌の聲もて圍まれしなり。

當て京都の雲居寺に於て人々歌よみける日。俊賴。

あけぬとも　猶秋風の　おとづれて
　野邊のけしきよ　面がはりすな

とよみたるを基俊評して曰く。腰の句にての字ゐたるは聞きにくしと。俊賴未だ答へざるに。琳賢といふ人曰く。拙者は腰にての字ある證歌一首を思ひ出だせりと。基俊曰ふ。さらば出だし給へ名歌にては必ず候はじと。琳賢貫之の歌を朗吟して曰く。

さくら散る　木の下風は　寒からで

と。基俊此に於て一言する能はず。

一日又人々相會して歌よむ事あり。基俊覺えず案じ得たる新句を聲に出だして。

めざましきまで　散る紅葉かな

と吟ぜしを。入道顯仲ひりかに聞きつけ。右馬助某に告げて我歌とせしめしかば。講師雙方の歌を朗讀せし後。基俊興さめて見えしと云ふ。是れ常に好みて人の歌を罵りたる返報とも謂ひつべし。

撰著の書數部あり。曰く悅目抄。曰く新撰朗詠集。曰く相撲立。曰く新三十六歌仙。

藤原爲業

崇德天皇の御宇に。伊豆伊賀の守を經て。皇太后宮大進たりし人なり。兄の爲盛。弟に賴業ありて。共に和漢の學に通ず。のち兄弟三人うちつれ隱遁して山城の大原山に住み。爲業は寂念と號せり。

尊卑分脈といふ書に。爲業を世繼の作者とせり。然れども世繼とは大鏡をも

いひ。榮花物語をもいへれば。何れか分きがたし。

藤原顯輔

修理大夫顯季の子なり。保延五年左京大夫に任じ。久安四年正三位に叙し。久壽二年剃髪せり。詞花和歌集の撰者たりし譽れは。和歌に秀でたる名と共に世に知らる。

子に清輔。重家。顯昭あり。いづれも歌人の名高し。

堀川

神祇伯顯仲の娘にて。鳥羽天皇の皇后璋子。後に待賢門院と申し奉るが官女なりき。續世繼に曰く。(顯仲伯の)女子は堀河の君。兵衛の君など聞え給ひて。皆歌よみれはすと聞えし。姉君は。もとは前齋院の六條と申しけるにや。

露しげき　野邊にならひて　きりぐ〜す
わが手枕の　したに鳴くなり

とよみ給へるなるべし。堀河とは後に申しけるなるべし。かやうの歌よみは。世に出で來たまはん事かたく侍るべし。と。

藤原清輔

左京大夫顯輔の子なり。太皇大后宮の大進に任じ。治承元年卒す。年七十四。二條天皇の御時。勅を奉じて續詞花集を撰びしが。奏覽を經ずして崩御ありしかば。勅撰に加はらずして止みにき。承安三年。長壽の人々を白河の寶莊嚴院に會して。尙齒會を開きし事は。人の知るところなり。

撰著の書おほく。袋草子。奥儀抄。初學抄。一字抄。枚笛抄。今撰抄などある中にも。前の二書ことに世に行はる。

源頼政

兵庫頭仲正の子にて。從三位右京大夫なりしが。高倉宮に勸めまゐらせて兵を起し。宇治川の戰に打ち負けて。治承四年平等院に討死せしは。人の知るところなれば委しく言はず。時に七十五歳なりき。剃髪の後は眞遠(一說には頼圓)と號し。源三位入道と呼ばれたり。一器量ある歌をよみたる人なりしは。辭世として傳へられたる。

うもれ木の　花さく事も　なかりしに

身のなる果は　あはれなりけり

の風調以ても味はひ知らるゝがかし。

娘は二條院には仕へて讃岐と呼ばれ。

わが袖は　汐干に見えぬ　沖の石の

人こそ知らぬ　かわく間もなし

の名歌よみたりとて。沖の石の讃岐てふ名を得たり。

平忠度（たいのり）

刑部卿忠盛の子にて。左兵衛佐薩摩守に任じ。一谷の戰に。岡部六彌太忠澄と組んで討たれたり。時に年四十一。忠澄うの籠を見れば。一首の和歌あり。

行き暮れて　木の下陰を　宿とせば

花やこよひの　あるじならまし

と。これに記し添へたる姓名もて。忠度なるを知りしといふ。

忠度はじめ軍に從はんとて京都を出づるや。狐川まで物せしを。俄に引き返して和歌の師俊成の門を敲き。請ふに勅撰の事あらば我歌一首を採錄せられん事を以てす。俊成涙ながら之を諾し。千載和歌集を撰ぶにあたり。朝敵の事なれば憚りて忠度の名をいはず。よみ人しらずとして之を載せたり。古鄕花といふ題にて。

さゝ波や　志賀のみやこは　荒れにしを

むかしながらの　山ざくらかな

世に傳へて美談とす。

中山忠親（なかやまただちか）

權中納言忠宗の子なり。內大臣に任じ。建久六年薨ず。水鏡の作あり。

第三十八章　散文の作例

小柴垣（柴上の幼時）

紫式部

日もいと長きにつれ〴〵なれば。夕暮のいたう霞みたるにまぎれて。かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。

人々は歸し給ひて。惟光ばかり御供にてのぞき給へば。唯この西おもて

にしも。持佛すゑ奉りて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて花奉るめり。中の柱に寄りゐて。脇息の上に經を置きて。いと惱ましげに讀みゐたる尼上。たゞ人と見えず。四十餘ばかりにていと白くあてに。痩せたれどつらつきふくらかに。まみのほど。髪の美しげにうがれたる末も。なかく長きよりも。こよなう今めかしきものかなと。あはれに見給ふ。

清げなるおとな二人ばかり。さては童部ゞ出で入り遊ぶ。中に十ばかりにやあらんと見ゆて。白き衣やまぶきなどの馴れたる着て走り來たる女子。あまた見ゆつる子供に似るべくもあらず。いみじう生先みえて。美しげなる形なり。髪は扇を廣げたるやうにゆらく〳〵として。顔はいと赤く摺りなして立てり。

何事ぞや。童部と腹だち給へるかとて。尼上の見上げたるに。少しおぼゆたる處あれば。子なめりと見給ふ。

雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠の中に籠めたりつるものをとて。いとくちをしと思へり。この居たるゐとな。例の心なしのかゝるわざをして。さいなまるゝこういと心づきなけれ。何方へまかりぬる。いとをかしうやう〳〵なりつるものを。烏などもこう見つくれとて。立ちてゆく。髪ゆるらかにいと長く。めやすき人なめり。少納言の乳母とゞ人いふめるは。この子の後見なるべし。

尼君いでゐなをさなや。いふかひなう物し給ふかな。おのがかく今日明日になりぬる命をば。何とも思ひたらで。雀慕ひ給ふほどよ。罪得る事ぞと。常に聞ゆるを。心うくとて。こちやと言へば。ついゐたり。つらつきいとらふたげにて。眉のわたり打ちけぶり。いわけなくかいやりたる額つき髪ざし。いみじう美し。ねびゆかん樣ゆかしき人かなと。目とまり給ふ。さるは限りなく心を盡し聞ゆる人に。いとよう似奉れるが。まもらるゝなりけりと思ふにも。涙ぞ落つる。

尼君髪をかきなでつゝ。梳る事をもうるさがり給へど。をかしの御ぐしや。いとはかなう物し給ふころ。あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば。いとかゝらぬ人もあるものを。故姫君は十二にて殿におくれ給

ひしほど。いみじう物は思ひ知り給へりしずかし。たゞ今おのれ見捨て奉らば。いかで世におはさんとすらんとて。いみじく泣くを。見給ふもすゞろに悲し。

稚心地にもさすがに打ちまもりて。伏目になりてうつぶしたるに。こぼれかゝりたる髪。つや〳〵とめでたう見ゆ。

生ひ立たん　ありかも知らぬ　若草を
おくらす露ぞ　消ぬんうらなき

また居たるおとな。げにと打ち泣きて。

初草の　生ひゆく末も　知らぬ間に
いかでか露の　消ぬんとすらん

と聞ゆる程に。僧都あなたより來て。こなたはあらはにや侍らん。今日しも端におはしけるかな。此かみの聖の方に。源氏の中將のわらはやみ呪ひに物し給ひけるを。唯今なん聞きつけ侍る。いみじう忍び給ひければ。得知り侍らで。こゝに侍りながら。御とぶらひにも得まうでざりける。このたまへば。あないみじや。いとあやしきさまを。人や見つらんとて籠おろしつ。（源氏物語若紫の卷）

時雨るゝ空（葵上の汲役）

御法事など過ぎぬれど。正日まで猶籠りおはす。時雨うちして物あはれなる暮つかた。中將の君。鈍色の直衣指貫。うすらかに衣がへして。をゝしくあざやかに。心はづかしきさまして參り給へり。君は西の妻戸の勾欄に押しかゝりて。霜枯の前栽見給ふ程なりけり。

風あらゝかに吹き。時雨さとしたる程。涙も爭ふ心地して。雨となり雲とやなりにけん今は知らずと。打ち獨ごちて。つらづゑ突き給へる御さま。女にては見捨てゝなくならん魂。必とまりなんかしと。色めかしき心地に打ちまもられつゝ。近うついゐ給へれば。しどけなう打ち亂れ給へるさまながら。紐ばかりをさし直し給ふ。

これは今少しこまやかなる夏の御直衣に。紅のつやゝかなる引き重ねて。やつれ給へるしも。見てもあかぬ心地ぞする。中將もいとあはれなるま

みに。ながめ給へり。

雨となり　しぐるゝ空の　浮雲を
　　いづれのかたと　分きてながめん

ゆくへなしやと。獨言のやうなるを。

見し人の　雨となりにし　雲井さへ
　　いとゞ時雨に　かきくらす頃

とのたまふ御けしきも。淺からぬ程しるく見ゆれば。あやしう年頃はいとしもあらぬ御志を。院など居立ち宣はせ。おとゞの御もてなしも心苦しう大宮の御かたざまにもてはなるまじきなど。かたゞにさしあひたれば。えしも振り捨て給はで。物うげなる御けしきながら。有り經たまふなめりかしと。いとほしう見ゆる折々ありつるを。誠にやんごとなく重き方は。殊に思ひ聞に給ひけるなめりと見知るには。いよ〳〵口惜しう思さる。よろづにつけて。光うせぬる心地して。屈しいたがりけり。枯れたる下草の中に。りんだう撫子などの咲き出でたるを。折らせ給ひて。中將の立ち給ひぬる後に。若君の御乳母宰相の君して。

草がれの　籬にのこる　なでしこを
　　わかれし秋の　かたみとぞ見る

にほひ劣りてや御覽ぜらるらんと。聞にたまへり。げに何心なき御笑顔ぞ。いみじう美しき。

宮は吹く風につけてだに。木の葉よりけにもろき御涙は。ましてとりあへ給はず。

今も見て　なか〳〵袖を　朽たすかな
　　かきほ荒れにし　大和なでしこ

（源氏物語葵の巻）

親のいさめ（內大臣と雲井の雁）　同じ人

とかく思しめぐらすまゝに。ゆくりもなく輕らかにはひわたり給へり。少將も御供に參り給ふ。姫君は齋寮も給へる程なり。うすものゝ單を着給ひて。伏し給へるさま。あつかはしくは見ねど。いとらうたげにさゝ

やかなり。透き給へる肌つきもいと美し。をかしげなる手つきして。扇を持たまへりけるながら。脇を枕にて打ちやられたる御ぐしの。いと長くこちたくはあらねど。いとをかしき末つきなり。人々も物のうしろによりふしつゝ。打ち休みたれば。ふとも驚い給はず。

扇を鳴らし給へれば。何心もなく見あげ給へるまみ。らうたげにて。つらつきの赤めるも。親の御目にはいと美しう見ゆ。

轉寐は諫め聞ゆるものを。などかいとはかなきさまにては。おほとのごもりける。人々も近くさぶらはであやしや。女は身を常に心づかひして。まもりたらんなんよかるべき。心やすく打ち捨てたるさまにもてなしたる。品なきわざなり。さりとていとさかしく身かためて。不動の陀羅尼讀み印つくりゐたらんもにくし。うつゝの人にも餘りけどほく。物隔てがましきなど。けだかきやうとても。人にくゝ心うつくしうはあらぬわざなり。

大きれとゞの。后がねの姫君ならはし給ふなる敎は。萬の事に通はしなだらめて。かど〳〵しき故もつけじ。たど〳〵しくおぼめく事もあらせじと。ゆるゝかにこうれきて給ふなれ。げにさもある事なれど。人として心にもするわざにも。立てゝ靡く方は方とあるものなれば。生ひ出で給ふさまあらんかし。此君の人となり。宮仕に出だし立て給はん世のけしきこそ。いとゆかしけれなどのたまひて。思ふやうに見奉らんと思ひし筋は。違ふやうになりにたる御身なれど。いかで人笑はれならずしなし奉らんとなん。人の上のさま〳〵なるを聞くごとに思ひ亂れ侍る。試みごとにねんごろがらん人の。ねざごとになん暫し靡き給ひそ。思ふさま侍るなど。いとらうたしと思ひつゝ聞え給ふ。（源氏物語常夏の卷）

女郎花（中宮御妊娠の頃）

同じ人

秋のけはひの立つまゝに。土御門殿のありさま。いはん方なくをかし。池のわたりの梢ども。遣水のほとりの草村。れのがじゝ色ゴきわたりつゝ。大かたの空もはんなるにもてはやされて。不斷の御讀經の聲に。あはれさまさりけり。やう〳〵涼しき風のけしきにも。例の絶ねせぬ水の

音なひ。夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも。近うさぶらふ人々。はかなき物語するを。聞しめしつゝ。惱ましうおはしますべかめるを。さりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまなどの。いと更なる事なれど。浮世の慰めには。かゝる御前をこう尋ね參るべかりけれと。うつし心をば引き違へ。たとしへなく萬わするゝにも。かつは怪しき。

まだ夜深き程の月さしくもり。木のもとをぐらきに。御格子まゐりなばや。女官はいまださぶらはじ。藏人まゐれなど言ひしろふほどに。後夜の鐘うちれどろかし。五壇の御修法ときはじめつ。

我も〳〵と打ちあげたる伴僧の聲々。遠く近く聞きわたされたるほど。おどろ〳〵しく尊し。觀音院の僧正。東の對より二十人の伴僧をひきぬて。御加持まゐり給ふ足音。渡殿の橋の。とど〳〵と踏み鳴らさるゝさへゞ。こと〳〵のけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場のれとど。遍昭寺の僧都は文殿などに。うちつれたる淨衣姿にて。ゆゑ〳〵しき唐橋

どもを渡りつゝ。木の間を分けて歸り入る。程も遙に見やらるゝ心地してあはれなり。さいさ阿闍梨も。大威德をうやまひて。腰を屈めたり。

人々まゐりつれば夜も明けぬ。渡殿の戸口の局に見いだせば。ほの打ち霧りたる朝の露もまだ落ちぬに。殿ありかせ給ひて。御隨身めして遣水はらはせ給ふ。

橋の南なる女郎花のいみじう盛なるを。一枝をらせ給ひて。几帳の上よりのゞかせ給へり。御さまのいとはづかしげなるに。わが朝顏の思ひ知らるれば。これ遲くてはわろからんと。のたまはするに事つけて。硯のもとによりぬ。

をみなへし　盛のいろを　見るからに
露の分きける　身こう知らるれ

あなとゝ。ほゝゑみて硯めしいづ。

白露は　分きて置かじを　をみなへし
こゝろからにや　色の染むらん

雪の山

（紫式部日記）

清少納言

さて十二月の十日あまりの程に。雪いと高う降りたるを。女房どもなどして。物の蓋に入れつゝ置くを。同じくは庭に誠の山を作らせ侍らんとて。侍召して仰事にていへば。集まりて作るに。主殿寮の人にて御清めに參りたるなども。皆よりていと高く作りなす。宮づかさなど參り集まりて。とと加へ殊に作れば。所の衆三四人參りたる。とのもりづかさの人も二十人ばかりになりにけり。

里なる侍召しに遣しなどす。今日この山つくる人には祿賜はすべし。雪山に參らざらん人には同じからず。とゞめんなどいへば。聞きつけたるは惑ひ參るもあり。里遠きは得告げやらず。

作りはてつれば。宮づかさ絹二ゆひ取らせて。様に投げいづるを。一つづゝ取りによりて。拜みつゝ腰に差して。皆まかでぬ。うへのきぬなど着たるは。かたへ去らで狩衣にてゞある。

これいつまで有りなんと。人々のたまはするに。十日あまりは有りなん。唯この頃の程を有る限り申せば。いかにと問はせ給へば。む月の十五日までさぶらひなんと申すを。御前にも得さはあらじと。おぼすめり。女房などは。すべて年の内つごもりまでもあらじとのみ申すに。あまり遠くも申してけるかな。げに得しもさはあらざらん。朔日などゞ申すべかりけると。下には思へど。さばれさまでなくと。言ひ初めてん事はとて。かたうあらがひつ。

廿日の程に雨など降れど。消ゆべくもなし。たけゞ少し劣りもてゆく。白山の觀音これ消やさせ給ふなと。祈るも物ぐるほし。（中略）

雪山はつれなくて年も歸りぬ。朔日の日。又雪多く降りたるを。うれしくも降り積みたるかなと思ふに。これはあいなし。始のをば置きて。今のをば搔き捨てよと仰せらる。（中略）

雪の山は。まことに越のにやあらんと見えて。消えげもなし。黑くなりて。見るかひも無きさまゞしたる。勝ちぬる心地して。いかで十五日待

ちつけさせんと念ずれど。七日をだに得過さじと猶いへば。いかでこれ見はてんと。皆人思ふ程に。にはかに三日内へ入らせ給ふべし。いみじうくちをしく。此山の果を知らずなりなん事と。まめやかに思ふ程に。人もげにゆかしかりつるものをなど言ふ。御前にも仰せらる。同じくは言ひあてゝ御覽ぜさせんと。思へるかひなければ。御物の具はこび。いみじう騒がしきに合はせて。木守といふものゝ。築土の程に庇さしてゐたるを。椽のもと近く呼びよせて。此雪の山いみじく守りて。童部などに踏み散らさせとぼたせで。十五日までさぶらはせ。よく〳〵守りて其日に當らば。めでたき祿たまはせんとす。私にもいみじき喜び言はんなど。かたらひて。常に臺盤所の人。下衆などに乞ひて。呉るゝ菓物や何やと。いと多く取らせたれば。うちゑみて。いとやすきこと。たしかに守り侍らん。童部などゞ登り侍らんと言へば。これを制して聞かざらんものは。事の由を申せなど言ひ聞かせて。入らせ給ひぬれば。七日までさぶらひて出でぬ。

うの程も是がうしろめたきまゝに。おほやけ人すましをさめなどして。絶えず戒めにけり。七日の御節供のおろしなどをやりたれば。拜みつる事など。歸りては笑ひあへり。

里にも明くる即ち。これを大事にして見せにやる。十日の程には五六尺ばかりありといへば。うれしく思ふに。十三日の夜雨いみじく降れば。これにゞ消えぬらんと。いみじうくちをし。今一日も待ちつけでと。夜も起き居て嘆けば。聞く人も物ぐるほしと笑ふ。

人の起きてゆくに。やがて起きねて下衆おこさするに。更に起きねばにくみ腹だゝれて。起き出でたるをやりて見すれば。わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう。童部も寄せで守りて。あすあさてまでもさぶらひぬべし。祿賜はらんと申すといへば。いみじくうれしく。いつしか明日にならば。いとゝう歌よみて。物に入れて參らせんと思ふも。いと心もとなうわびしう。まだ暗きに。大きなる折櫃など持たせて。これに白からん處ひたもの入れて持てこ。きたなげならんは搔き捨てゝな

ど。言ひくゝめてぞりたれば。いとゝく持たせてやりつる物ひき提げて。早う失せ侍りにけりといふに。いとあさまし。

をかしうよみいでゝ。人にも語り傳へさせんと。うめきずんじつる歌も。いとあさましくかひなく。いかにしつるならん。昨日さばかりありけんものを。夜の程に消えぬらん事と。言ひくんずれば。木守が申しつるは。昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらんと思ひつるものを。賜はらずなりぬる事と。手を打ちて申し侍りつると。言ひさわぐに。内より仰事ありて。さて雪は今日まで有りつやと。のたまはせたれば。いとねたくゝちをしけれど。年の内ついたちまでだにあらじと。人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを。いとかしこしとなん思ひ給ふる。今日まではあまりの事になん。夜のほどに人のにくがりて。取り捨て侍るにやとなん。推しはかり侍ると。啓させ給へと。聞えさせつ。

さて廿日に參りたるにも。まづ此事を御前にてもいふ。皆消えつとて。蓋のかぎり引き提げて持て來りつる。帽子のやうにて即ちまうできたりつるが。あさましかりし事。物の蓋に小山うつくしう作りて。白き紙に歌いみじく書きて。參らせんとせし事など啓すれば。いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに。かう心に入れて思ひける事を。違へたれば罪得らん。まことには四日の夕さり。侍どもやりて取り捨てさせしが。返事に言ひあてたりしこうをかしかりしか。うの翁いできて。いみじう手をすりて言ひたれど。仰事ぞ。かの寄り來らん人にかう聞かずな。さらば屋うち毀たせんといひて。左近のつかさ南の築土の外に。皆とりすてし。いと高くてなん有りつと言ふなりしかば。げに廿日までも待ちつけて。ようせずは。今年の初雪にも降り添ひなまし。上にも聞しめして。いと思ひよりがたくあらがひたりと。殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌を語れ。今はかく言ひ顯しつれば。同じこと勝ちたり。語れなど御前にも宣はせ。人々も宣へど。何せんにか。さばかりの事を承りながら啓し侍らんなど。まめやかにうく心うがれば。上も渡らせ給ひて。まことに年頃は多くの人なめりと見つるを。是にぞあやしく思ひし。な

ど仰せらるゝに。いとどつらく打ちも泣きぬべき心地がする。いであはれいみじき世の中がかし。後に降りつみたりし雪をうれしと思ひしを。うれはあいなしとて。かき捨てよなどこう仰事侍りしか。と申せば。げに勝たせじとおぼしけるならんと。上も笑はせおはします。（枕草子）

今まゐりの頃　同じ人

宮に始めて參りたる頃。物の耻かしきこと數知らず。涙も落ちぬべければ。よる〳〵參りて。三尺の御几帳のうしろに侍ふに。繪など取り出でゝ見せさせ給ふだに。手も得さしいづまじうわりなし。これはとありかれはかゝりなど。宣はするに。高坏にまゐりたる大殿油なれば。髪の筋なども。なか〳〵晝よりは顯證に見えてまばゆけれど。念じて見などす。いとつめたき頃なれば。さし出ださせ給へる御手のわづかに見ゆるが。いみじうにほひたる薄紅梅なるは。限なくめでたしと。見知らぬさとびた心地には。いかゞは。かゝる人こう世におはしましけれと。懲かるゝまでゞ守り參らする。

曉にはとくなど急がるゝに。葛城の神も暫しなど仰せらるゝを。いかでずちかひても御覽ぜんとて伏したれば。御格子もまゐらず。女官まゐりて是れ放たせ給へといふを。女房きゝて放つを。待てなど仰せらるれば。笑ひて歸りぬ。物など問はせ給ひ宣はするに。久しうなりぬれば。おりまほしうなりぬらん。さははやとて。よさりはとくと仰せらるゝ。

ねざり歸るや遲きと明け散らしたるに。雪いとをかし。今日は盡つかた參れ。雪に曇りてあらはにもあるまじなど。たび〳〵召せば。この局あるじも。さのみや籠りねたまふらんとする。いとあへなきまで御前ゆるされたるは。思しめすやうこうあらめ。思ふに遠ふはにくきものゞと。唯いうがしに急がせば。我にもあらぬ心地すれば。參るもいとゞ苦しき。火燒屋のうへに降り積みたるも。めづらしうをかし。

御前ちかくは。例のすびつの火こちたくおこして。うれにはわざと人もねず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるまゝに。近くさぶらふ。次の間に長すびつに間なく居たる

人々。朋衣着垂れたる程なり。やすらかなるを見るも羨ましく。御文とりつぎ立ち居ふるまふさまなど。つゝましげならず。物言ひ笑みわらふ。いつの世にかさやうに交らひならさんと。思ふさへずつゝましき。奥よりて三四人つどひて。給など見るもあり。

しばしありて。先高う追ふ聲すれば。殿まゐらせ給ふなりとて。散りたるものども取りやりなどするに。奥に引き入りて。さすがにゆかしきなめりと。御几帳の綻びよりわづかに見入れたり。大納言の參らせ給ふなりけり。御直衣さしぬきの紫の色。雪にはゑてをかし。

柱のもとに居給ひて。昨日今日物忌にて侍れど。雪のいたく降りて侍れば。おぼつかなさになど宣ふ。道もなしと思ひけるに。いかでかとぞ。御いらへあなる。打ち笑ひ給ひて。あはれともや御覽ずるとて。などのたまふ。御ありさまは。これよりは何事かまさらん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども。たがはざめりと覺ゆ。

宮は白き御衣どもに。紅の唐綾ふたつ。白き唐綾と奉りたる。御ぐしの

かゝらせ給ふなど。給にかきたるをこうかゝる事は見るに。現にはまだ知らぬを。夢の心地ぞする。

女房と物いひたはぶれなどし給ふを。いらへいさゝか耻かしとも思ひたらず。問ひ返し。空言など宣ひかくるを。あらがひ論じなど聞ゆるは。目もあやにあさましきまで。あいなく面ぞ赤むや。

御菓物などして。御前にもまゐらせ給ふ。御几帳のうしろなるは。誰ぞと問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこうあらめ。立ちておはするを。外へにやあらんと思ふに。いと近う居たまひて。物など宣ふ。まだ參らざりし時。聞き置き給ひける事など宣ふ。誠にさありしなど宣ふに。御几帳へだてゝように見やり奉るだに。はづかしかりつるを。いとあさましう。さし向ひ聞ゑたる心地。うつゝとも覺えず。行幸など見るに。車の方にいさゝか見おこせ給ふは。下簾ひきつくろひ。透影もやと扇をさしかくす。猶いと我心ながらもおぼけなく。いかで立ち出でにしぞと。汗あゑていみじきに。何事をか聞ゑん。

かしこき陰と捧げたる。扇をさへ取り給へるに。振りかくべき髪のあやしさゝへ思ふに。すべて誠にさるけしきや附きてこう見ゆらめ。とく立ち給へなど思へど。扇を手まさぐりにして。給は誰がかきたるぞ。などのたまひて。をみにも立ち給はねば。袖を押しあてゝうつぶしゐたるを。唐衣に白いもの移りて。まだらになんかし。

久しう居給ひたりつるを。論なう苦しと思ふらんと。心得させ給へるにや。これ見給へ。これは誰がかきたるぞと聞わさせ給ふを。うれしと思ふに。給ひて見侍らんと申し給へば。猶こゝへと宣はすれば。人をとらへて立て侍らぬなりと宣ふ。人の草假名かきたる草紙とりいでゝ御覽ず。誰がにかあらん。かれに見せさせ給へ。うれぞ世にある人の手は見知りて侍らんと。あやしき事どもを。唯いらへさせんと宣ふ。

一ところだにあるに。又さき打ちおはせて。同じ直衣の人まゐらせ給ひて。これは今すこし花やぎ。さるがふ言など打ちし。ほめ笑ひ興じ。われも何がしが。とある事かゝる事など。殿上人のうへなど申すを聞けば。

猶いと變化のもの。天人などのれりきたるにやと覺えてしを。さぶらひなれ日頃すぐれば。いとさしもなきわざにこうありけれ。かく見る人々も。家の内いでうめけん程は。さこうは覺えけめど。かくしもてゆくに。おのづから面なれぬべし。

物など仰せられて。我をば思ふやと問はせ給ふ御いらへに。いかにかはと啓するに合はせて。大盤所のかたに鼻を高くひたれば。あな心う。空言するなりけり。よし〳〵とて入らせ給ひぬ。いかでか空言にはあらん。

よろしうだに思ひ聞わさすべき事かは。鼻こうは空言しけれと覺ゆ。

さても誰かゝくにくきわざしつらんと。大かた心づきなしと覺ゆれば。わがさるをりも。おしひしぎかへしてあるを。ましてにくしと思へど。まだうひ〳〵しければ。ともかくも啓し直さで。明けぬればれりたるすなはち。淺緑なる薄様に艶なる文をもてきたり。見れば。

いかにして　いかに知らまし　傷を
空にたぐすの　神なかりせば

となん御けしきいとあるに。めでたくもくちをしくも。思ひみだるゝに。猶よべの人が。尋ね聞かまほしき。

うすきこう　うれにもよらめ　はなゆゑに
うき身のほどを　知るぞわびしき

猶これば かりは啓し直させ給へ。しきの神もれのづからいとかしこしとて。参らせて後も。うたて折しもなどて。さはたありけんといとをかし。

龜山の麓　大貳三位

龜山の麓に。慈心寺などいふわたりに。故宮のいかめしき寺たて給ひて。ともすれば籠りつゝ。不斷の念佛など行ひ給ふを。此秋は御心地くるしうて。ねわたり給はざりつれば。長月にだに。まぎれなく念佛もして。やがて消ねも果てんと思して。わたり給ふなりけり。葛はひかゝる松蔭のけしきも。久しう見給はざりつる程に。いとゞさびしさまさりけり。いとゞかれはてなん頃ほひ。いかやうになりがめくらし給はんと。見ずなりなん世の事のみ。心にかゝり給ひて。うしろめたういみじく思さるゝに。いかでかくしも思はじ。さりともむげにいたづらになり給ふべき。御ありさまにはあらぬものを。我身のゆきまどはん道のほだしは。いといみじかるべきをと。かつはねぼしなぐさめつゝ。四十九日はじめ給ひて。日々に尊くあはれなる事どもを聞き給ふまゝに。なゞて年頃も唯とくかやうになりて。罪を少し失はざりつらんと。悔しければ。苦しきもせちに念じつゝ行ひ給へど。露よりも先にやと見ゆる折がちになりまさり給ふ。

大將は日毎にいとねんごろにとぶらひ聞ね給ふを。ありがたくうれしき御心と喜び聞ねさせ給ふに。みづからも忍びて渡り給へり。宰相もあからさまに京に出で給ひにけり。

廿日なれば月さへ遲く出づる頃にて。ことゝふべき垣根もねぼつかなければ。こゝかしこたゝずみつゝ見めぐり給ふに。いと大きなる堂どもあまたありて。三味つとめ行ふけしき尊げにて。僧坊どもあまた續きなどはせで。こゝかしこ竹の林ばかりをぐらうしなしつゝ。長き世の住家と

思ひたるも。目とまりてあはれに羨ましくれぼさる。

山よりわづかに落ちくる水を。ほの〳〵竹の樋どもを蜘蛛手にまかせやりつゝ。待ち受けたるさまも。氷のくさび固めたらん頃ほひは。いかゞと心細げさるなま限なし。

居給へるところと見ゆるは。寺よりは少しのきてゞありける。帶にせる細谷川の音さやかに流れて。同じき岩のたゝずまひも心あるけしきしるく。時をりふしの花紅葉の木どもゝ。數を盡したると見にて。見どころ多くゞしなされたりける。

されど淺茅が原も。殊に尋ぬる人もなかりけると見にて。心のまゝに色を盡して亂れあひたる草前栽どもに。露の白玉と心得て。虫の音も外よりは。耳のいとまなかりけり。軒を爭ふ八重葎も。げに人こゝ見にね。秋のけしきは。とく知られぬべかりけり。稻葉の風も耳近くは聞き習ひ給はぬに。稻負鳥さへ音をふも。さま〳〵に樣かはりたる心地して。物心ぼうげなり。

されどこゝには人あるけしきもせで。尤體の阿彌陀ぼとけはする御堂に。やがてぼはずるなりけり。堂の飾など。極樂もかくやと思ひやられて。いときゝゝかに尊かりけるを。など今まで見ざりつらんとくちをし。

坊どもに小法師ばらの物ずんじなどする聲ばかりは。ほのかに聞にて。例ならずわづらふ人のあたりとも覺えず。靜に心ぼそげなり。懺法阿彌陀經などの聲ばかりゞ聞ゆる。

人の聲する處によりて。通季かくなんと聞にさすれば。驚き給ひて。やがて臥し給へる母屋の御簾の前に。茵うちしきて入れ奉り給へり。月は無けれど。星の光ばかりさやかなるに。軒近くていたくたゞ〳〵しき程にもあらねば。大かた御容體うちふるまひ給へるさまなど。あなめでたと見に給へるに。風に隨ひてくゆり入りたる匂さへ。げにこうはなべての人にはまさりけれ。

よろづ思ひやり聞ゆるよりも。今少しめでたくはづかしげなる御有樣を。さもやなど思ひよりけるに。おほけなくいとつゝましく覺えらるゝもの

から。又かゝらん人をこそ。年に一夜のわたりにても。待ちつけて見るべかりけれ。見つる世になどてはかゝしき御有樣に。もてなし聞えずなりぬらんと。苦しき御心地にもいとど胸さわぎまさりて。せちに頭もたげてゞ見やり給ふ。（狹衣）

嵯峨野

作者しらず

む月十日あまりの頃。中の君。今や嵯峨野の春のけしきをかしかるらん。忍びつゝ見んなど誘ひければ。れの〳〵誠になどいひて。出で立ち給ひけり。侍も內ゆりたるをゞ御供に參りける。網代車三輛。一輛には姫君。今一輛には中の君。三の君。一輛には衣のつま淸げに出だして。若き女房下仕など乘りたりけり。

少將ほの聞きて。嵯峨野へ先に行きて。松原に隱れ居て見れば。この車ども近くやりよせて立て並べたり。雜色牛飼などをば遠くのけて。侍二三人ばかり近くよせて。女房はしたものなど。車よりおりて松引き遊びけり。姫君たち車の簾あげたればゞ。たしかならねどほのかに見ゆ。

少將よく隱れて見るをも知らず。女房ども。いとをかしき物のけしき御覽ぜよかし。見苦しくも侍らず。さま〳〵の草ども萠え出でたり。なつかしくなど聞ゆれば。中の君おり給へり。紅梅の上に濃き綾の袿着給へり。さしあゆみ給へるさまいとあてやかに。髮は袿の裾にひとしかりけり。次に三の君おり給へり。花山吹の上に萠黃の袿なり。ありつかはしきさまは。今すこし優りてゞ見え給へる。

姫君はとみにもおり給はぬを。いかにと責めければ。侍從さしよりて。いかに人をばおろしまゐらせてと申しければ。おり給へり。櫻がさねの御衣に紅の單袴ふみしだき。さしあゆみ給へる御姿。いとらうたく美しなどいふもおろかなり。髮は袿の裾にゆたかにあまり。丈の程まみ口つきいとあてやかに。異人々よりも。今一しほ匂加はりて見え給へば。是を人に見せばやと驚かれ給ふ。

おの〳〵人ありとも知らで遊びあへるを。よく〳〵見給ひて。少將あくがれて。大きなる松の下に居たまへるを。この姫君しも見つけ給ひて。

顔うちあかめて。いりぎ車に乘りたまへるにつけても。心あるさまなり。おの〳〵騷ぎあへるさまも。あらまほしき程なり。（住吉物語）

琴の聲

作者しらず

うの又の日。御子かうやうくゑんに出で給ひぬと聞きて。參り給へれば。風すさましき夕に。時雨とき〴〵打ちうゝぐ程の村雲。立ちわたりて。心細げなること限なく。ものあはれなるに。又知らず面白き琴の聲を聞きつけたる。うれしき事かぎりなくて。さるべき物の隈に立ち隱れて見れば。おはします處は。京の檜皮の色もせず。紺青を塗りかへしたるやうに。唯大方の調度は赤きに。朱塗りたるさまにて。錦の緣さしたる御簾ども。かけわたし飾られたるに。巽の方に大きなる山より瀧高く落ちたるを。湧きかへり待ち受けたる岩のたゝずまひ。世の常ならず。たぎりて流れ出でたる水の邊に。色々うつろひ渡れる菊の花のいとおもしろきを。振ばるゝなるべし。うなたのつまの御簾まきあげて。いみじうさうぞきたる女房。うるはしく髮あげ。紺帶領巾などして。いろ〳〵團扇をさしかくしつゝ。錦を敷ける椽に十餘人ばかり並び居たり。上手のかきたりし唐畫に違はず。

上げたる御簾の程に。紫の唐のすゞの御几帳うちあげて。唐組の紐ながやかに麗しきを押しやりて。琴ひき給ふなり。后のおはするとも。異事なく見れば。御年二十ばかりにやおはすらんと覺にて。御顏のようだい細くもあらずふくらにもあらず。よき程なるが。中すこしもりたる心地して。御色の白さは。玻瓈白玉といふとも。これには優らざりけんと覺ゆるに。愛敬いみじく匂ひ薫りて。眉ものよりけだかく見なし給ふに。唇は丹といふもの塗りたるやうに。いさゝかもねぢけたる處なく。あたりまでも匂ひて。髮あげ麗しき御さまにて。のどかにながめいでつゝ琴を彈き給ふ。この世にかゝる事を見るやと。あさましきまでぞ覺ゆる。日本の人は。髮は唯うち亂れ。額髮もよりかけなどしたるこそ。我かたざまになつかしくなまめきたる事なれと。思ひ出づるに。うるはしく簪して髮あげられたるも。人がらなりければにや。是こうめでたく樣こと

なりけれと見るに。物の音さへ世に知らず聞ゆるに。若き女房七八人ばかり。天くだりけん少女の姿かくやと見ゐて。菊の花もてありびつゝ。らんけいふんの嵐のと。若やかなる聲合はせてずんじたる。めづらかに聞ゆ。御簾の中なる人々も。此花開けて後と口ずさびずんずるなり。殊に男は歌よむめるを。女はえよまぬにや。花を見ても文をずんじあへる。いと知らまほしきに。后御簾をおろして入り給ひぬ。

（濱松中納言物語）

若君姫君

作者しらず

いつの頃にか。權大納言にて大將かけ給へる人。御かたち身のざゐ心もちひより始めて。人から世のおぼゐも。なべてならず物し給へば。何事かはあかぬ事あるべき御身ならぬに。人知れぬ御心の内。物思はしさゞいと盡せざりける。

北の方二ところ物し給ふ。一人は源宰相と聞ゆしが御娘に物し給ふ。御志はいとしもすぐれねど。人より先に見うめ給ひてしかば。おろかならず思ひ聞ゆ給ふに。いとど世になく玉光る男君さへ生れ給ひにしかば。又なく去りがたきものに思ひ聞ゆ給へり。今一ところは。藤中納言と聞ゆしが御娘に物し給ふ御腹にも。姫君のいと美しげなる生れ給ひしかば。さまゝ〳〵珍しく。思ふさまにおぼしかしづく事かぎりなし。

上たちの御有樣の。いづれもいとしもすぐれ給はぬを。思ずさまならず口惜しき事に思したりしかば。今は君達のさまゝ〳〵美しうて生ひ出で給ふに。いづれの御方をも捨て難きものに思ひ聞ゆ給ひて。今はさるかたにおはしつきにたるべし。君達の御かたちの何れもすぐれ給へるさま。唯同じものとのみ見ゆ給て。取りも違へつべう物し給ふを。同じ處ならましかば不用ならましを。ところゝ〳〵にて生ひ出で給ふず。いとよかりける。

大かたは唯同じものと見ゆる御かたちの。若君はあてにかをりけだかく。なまめかしきかた添ひて見ゆ給ふ。姫君は花々とほこりかに。見てもあく世なく。あたりにもこぼれちる愛敬などず。今より似るものなく物し

給ひける。

いづれもやう〳〵れとなび給ふまゝに。若君はあさましう物耻をのみしを給ひて。女房などにだに。少し御前遠きには見ゐ給ふ事もなく。父の殿をも耻かしくのみれぼして。やう〳〵御書ならはし。さるべき事ども教へ聞ゐ給へど。れぼしもかけず。唯いと耻かしとのみおぼして。御帳の内にのみ埋もれ入りつゝ。給かき雛あうび貝おほひなどし給ふを。殿はいとあさましき事にれぼし宣はせて。常にさいなみ給へば。はて〳〵は涙をさへこぼして。あさましうつゝましとのみおぼしつゝ。たゞ母上御乳母。さらぬはむげに小さき童などにゞ見ゐ給ふ。

さらぬ女房などの御前に參れば。御几帳にまつはれて。耻かしういみじとのみれぼしたるを。いと珍らかなる事に思し歎くに。又姫君は今よりいとさがなくて。をさ〳〵内にも物し給はず。外にのみつとれはして。若き男ども童部などゝ。鞠小弓などをのみ翫び給ふ。御出居にも人々まゐりて。詩作り笛吹き歌うたひなどするにも。走り出で給ひて。もろともに。人も教へ聞ゐぬ琴笛の音も。いみじう吹き立て彈き鳴らし給ふ。物うちずんじ歌うたひなどし給ふを。參り給ふ殿上人上達部などは。めでうつくしみ聞ゐつゝ。かたへは教へ奉りて。この御腹のをば姫君と聞ゐしは。僻事なりけりなどゞ皆思ひあへる。殿の見あひ給へる折こそ。取りとゞめても隱し給へ。人々の參るには。殿の御裝束などし給ふ程。まづ走り出で給ひて。かく馴れ遊び給へば。中々に制し聞ゐ給はねば。たゞ若君とのみ思ひて。興じうつくしみ聞ゐあへるを。さ思はせてのみ物し給ふ。御心の内にゞいとあさましく。かへす〳〵取りかへばやとゞれぼされける。（とりかへばや物語）

物まうで

初瀬川など打ち過ぎて。うの夜御寺に詣でつきぬ。敢などして登る。三日さぶらひて。曉にまかでんとて打ち眠りたるに。夜さり御堂のかたよりり。すは稲荷より賜はるじるしの杉よとて。物を投げ出づるやうにするに。うち驚きたれば夢なりけり。

菅原孝標の女

曉よふかく出で〻得とまらねば。奈良坂のこなたなる家を尋ねて宿りぬ。これもいみじげなる小家なり。こゝはけしきある處なめり。ゆめいぬな。れうかいの事あらんに。あなかしこ。ねびに騒がせ給ふな。息もせで伏させ給へといふを聞くにも。いといみじうわびしく恐ろしうて。夜を明かす程。千年を過す心地す。からうじて明け立つ程に見れば。盜人の家なり。あるじの女けしきある事をしてなんありけるといふ。いみじう風の吹く日宇治のわたりをするに。網代いと近う漕ぎよせたり。

音にのみ　聞きわたりこし　宇治川の
あじろの波も　今日ぞ數ふる

二三年四五年へだてたる事を。次第もなく書きつゞくれば。やがて續き立ちたる修行者めきたれど。さにはあらず。年月へだゝれる事なり。春頃鞍馬に籠りたり。山際かすみわたりのどやかなるに。山のかたより。縱に野老など掘りもてくるもをかし。いづる道は花も皆散りはてにければ。何ともなきを。神無月ばかりに詣づるに。道のほど山のけしき。此頃はいみじうすまさるものなりける。山の端錦を廣げたるやうなり。たぎりて流れゆく水。水晶を散らすやうに湧きかへるなど。いづれにもすぐれたり。詣で着きて僧坊に行きつきたる程。かきしぐれたる紅葉の。たぐひなくぞ見ゆるや。

わく山の　紅葉のにしき　外よりも
いかにしぐれて　深く染めけん

とぞ見やらるゝ。

二年ばかりありて。又石山に籠りたれば。夜もすがら雨もいみじく降る。旅居は雨いとむつかしきものと聞きて。蔀もしあげて見れば。有明の月の。谷の底さへ曇りなく澄みわたり。雨と聞こつるは。木の根より水の流るゝ音なり。

谷川の　ながれは雨と　聞ゆれど
ほかよりけなる　有明の月

又初瀬に詣づれば。はじめにこよなく物だのもし。處々に設けなどして

行きもやらず。山城の國柞の森などに。紅葉いとをかしき程なり。初瀬川わたるに。

はつせ川　立ちかへりつゝ　尋ぬれば
　　杉のしるしも　此たびや見ん

と思ふもたのもし。

三日さぶらひてまかでぬれば。例の奈良坂のごなたに。小家などに。此度はいと類ひろければ。久宿るまじうて。野中に假初に庵つくりてする。たれば。人はたゞ野に居て夜を明かす。草の上に行騰などを打ち敷きて。上に莚を敷きて。いとはかなくて夜を明かす。頭もしとゝに露ぬく。曉がたの月いとをかしく澄みわたりて。よに知らずをかし。

ゆくへなき　旅の空にも　ぬくれぬは
　　都にて見し　ありあけの月

何事も心にかなはぬ事もなきまゝに。かやうに立ち離れたる物詣をしても。道のほどをゝかしとも苦しとも見るに。ねのづから心も慰み。さりとも頼もしう。さしあたりて嘆かしなど覺ゆる事ども無いまゝに。唯をさなき人々を。いつしか思ふまゝにしたてゝ見んと思ふに。年月の過ぎゆくを心もとなく。頼む人だに。人のやうなる喜してはとのみ。思ひわたす心地たのもしかし。（更科日記）

百濟の川成飛彈の工

源隆國

今は昔。百濟の川成といふ繪師ありけり。世に並び無きものにてありける。瀧殿の石も。此川成が立てたるなりけり。同じき御堂の壁の繪も。此川成がかきたるなり。

さる間。川成從者の童の逃げにける。東西を求めけるに求め得ざりければ。或る商家の下部を雇ひて語らひて曰く。己れが年頃つかひつる從者の童。既に逃げにけり。これ尋ねて捕りて得させよと。下部の曰く。やすき事にはあれども。童の顔を知りたらばこそ搦めゝど。顔を知らずしては如何でか搦めんと。川成げにさる事といひて。壁紙を取り出でゝ。童の顔の限をかきて下部にわたし。此に似たらん童を捕るべきなり。東

西の市は人集まるところなり。うの邊に行きて窺ふべきなりといへば。下部りの顔の形を取りて。即ち市に行きぬ。

人きはめて多かりといへども。此に似たる童なし。暫く居て。もしやと思ふ程に。此似たる童いできぬ。うの形を取り出でゝくらぶるに。つゆ違ふところなし。これなりけりと搦めて。川成がもとにわてゆきぬ。川成これを得て見るに其わらは。いみじく喜びけり。其頃これを聞く人。いみじき事になんいひける。

しかるに其頃。飛彈の工といふ工ありけり。都遷の時の工なり。世に並びなきものなり。豐樂院は其工の立てたれば。いみじきなるべし。

さるあひだ。此工かの川成となん。れの〳〵其わざを挑みにける。飛彈の工川成にいはく。わが家に一間四面の堂をなん立てたる。おはして見給へ。又壁に繪などかきて得させ給へとなん思ふと。互に挑みながら中よくてなん戯れければ。かくいふ事なりとて。川成飛彈の工が家に行きぬ。

行きて見れば。げにをかしげなる小さき堂あり。四面に戸みな明きたり。飛彈の工かの堂に入りて其内見給へといへば。川成様に上りて南の戸より入らんとするに。其戸はたと閉づ。驚きて廻りて西の戸より入る。又其戸はたと閉ぢぬ。又南の戸は明きぬ。然れば北の戸より入るには。其戸は閉ぢて西の戸は明きぬ。又東の戸より入るに。其戸は閉ぢて北の戸は明きぬ。かく廻り廻るあまた度。入らんとするに閉ぢ明きつ。入る事を得ず。わびて様よりれりぬ。其時に飛彈の工わらふ事かぎりなし。川成ねたしと思ひて歸りぬ。

其後日頃を經て。川成飛彈の工がもとに言ひ遣るやう。わが家にれはせ。見せ奉るべき物なんあると。飛彈の工。定めて我をたばからんずるなめりと思ひて行かぬを。たび〳〵懇に呼べば。工川成が家に行き。この來れる由を言ひ入れたるに。となたに入り給へと言はしむ。いふに隨ひて。廊のある遣戸を引き明けたれば。内に大きなる人の。黒ばみ脹れ爛れたる臥せり。くさきこと鼻に入るやうなり。思ひかけぬに斯かる物を見た

れば。聲を放ちて驚きてのきかへりぬ。川成内に居て。此聲を聞きて笑ふ事かぎりなし。

飛彈の工れかろしと思ひて。土に立てるに。川成ゐの遣戸より顔を差し出でゝ。やおのれ。かくもありけるは。たゞ來れと言ひければ。おづおづ寄りて見れば。障子のあるに。早う其死人の形をかきたるなりけり。堂に謀られたるが妬きによりて。此くしたるなりけり。

二人の者のわざ此くなんありける。其頃の物語には。萬の處に之を語りてなん。皆人ほめけるとなん語り傳へたるとや。（今昔物語）

御堂供養　作者しらず

御堂供養。治安二年七月十四日と定めさせ給へれば。萬をしづごゝろなう。夜を晝にねぼし營ませ給ふ。池を堀る翁の。あやしき影のうつれるを見て。

くもりなき　鏡とみがく　池の面に
うつれる影の　はづかしきかな

といふを聞きて。頭白き老法師。

かくばかり　さやけく照れる　夏の日に
わがいたどきの　雪ぞ消ぬせぬ

といふも。物を思ひ知るにやとあはれなり。

東の大門に立ちて東の方を見れば。水の面の間もなく筏をさして。多くの榑材木をもてはこぶ。大かた御堂の中をば更にもいはず。院のめぐりまで。世の中の上下立ちこみたり。よろづに磨き立てさせ給ふまゝに。院の内。金剛不壞の勝地と見えてめでたし。國々の受領ども。皆仰事の物さまゝ持て參りこみたるを御覽ずれば。おきて仰せられたるよりも差し進み。にもいはずめでたうして持て參りたり。我も〳〵と。劣らじ負けじと思ひたるけしきどもゝをかし。七寶は降りに降り。四方より來ると見にて。目も及ばぬ御有樣なり。

さきゝの御堂の會に。よろづは皆しつくさせ給へれど。此度は行幸行啓あるべう。おぼしおきてさせ給へりければ。うの御用意ありさま。設

けの物どもいとゞ心ことゝなり。上達部殿上人の此祿。樂人舞人のかづけものまで。いみじう清らにおぼしめすに。また七僧百僧の法眼どもなど。すべて世の中に滿ちたる度の御いうぎなり。諸僧たちも。此度の御いうぎを大事に思へり。我身の裝束ども。童部法師ばらのなりまで。しゴゴふろなう思ひ急ぎたり。やんごとなく又若やかならんなどが。急ぎ騷ぐはことわりなり。年など老い久しくもあるまじき僧などの。急ぐさまもいへばおろかなり。

二三日かけては。試樂といふ事せさせ給ふ。かの日はあへて人參るべくもあらざなれば。今日だにとて。老いたる若き參りつどふ。七八十の媼翁。杖ばかりを賴もしきものにて出で立ちたるさま。いみじうあはれなり。御堂の御前のもなかに舞臺ゆはせて。今日かの日の舞ども。殘りなくしつくさせ給ふ。

日頃ともすれば雨降りて。この程の御有樣いかに〳〵と申し思ひて。この御堂にもさま〴〵の御祈ども。よもやまの佛神にも。いみじき事ども

ありつればにや。きのふけふ名殘なく晴れて。日頃のなごりなし。此あやしのものども。あまりなるまで御前近う立ちこみたり。人々いと見ぐるしがれば。少しのけさせよと宣はすれば。この得もいはぬ老人ども拂はれて。かの法會の日は得參るまじければ。かしこう搏へて今日參りたるなり。あが君や。黃泉土產にし侍らんずるなり。助け給へと手をするもあはれにて。得きはやかにも逐はず。

かくて萬の事をしとゝのへさせ給ひて。十三日の夜さり。かんの殿大宮西殿におはしませば。一つ御車にて渡らせ給ふ。女房車ども。皆この御堂の西の廂におろさせ給ふ。御前たちは此堂の西の廂。未申の方かけてゞ皆おはします。かんの殿の女房。やがて同じ方の廊におりぬ。

皇太后宮の御迎に。關白殿參らせ給ふ。中宮は內におはしませば。內の大殿。上達部殿上人諸大夫など。おの〳〵分れ〳〵參る。何れも御輿はところせければ。皆唐の御車にてゞ渡らせ給ふ。御有樣いとよろほし。

中宮の御車には。二條殿の御方さぶらひ給ふ。皇太后宮の御車には。一

品の宮おはしまし。五の御方つかうまつり給へり。宮々の女房おの〳〵二三人づゝずさぶらふ。大宮のおはしましつるやうに。西面の大門より入らせ給ふ。大宮おはしましませば。御車は中門の外より手ひきにて入らせ給ふ。ありつる同じ御局に入らせ給ひぬ。

皇太后宮中宮の女房。みな東の廊にさぶらふ。南の方なる廊には。小一條の院の女御殿おはします。阿彌陀堂の南の廊には。關白殿のうへおはします。金堂のもとの廊には。內大臣殿のうへおはします。また春宮中宮の大夫殿たちの御棧敷もあり。經藏の南の廊には。三位中將殿のうへの御車。三つ四つひきつゞけて。にもいはず乘りこぼれて。女房車などのさぶらふも。見るに今めかしういみじ。

殿の御前は。東の築地崩させ給ひて。世の中の車ども參りて物見るべきやうに。おきてさせ給へり。さるべきやんごとなき車ども立ち込みぬれば。わろ人の車よりくべうもあらねば。この南の廊などに立ち込めど。うれも其大門の外に絹屋うちて。こゝらの併のうこより參るべければ。

近くは得寄り參らず。行幸行啓をだに見んとてゞ立ち込みためる。かくて日うらゝかにさしいづる程に。御方々の女房達のさぶらふ御簾際の程。見わたせば。御簾の編間より始め綠まで。世の常ならず珍らかなるまで見ゆるに。朽葉女郎花桔梗萩などの織物。糸ゆふなどの裾濃の御凡帳。村濃の紐どもして。さま〳〵心ばへある繪を。泥してかゝせ給へり。

えもいはずめでたき袖口。衣のつまどもの打ち出だし渡したる。見るに目かゞやきて。何とも見分きがたし。その中にも紅撫子の引倍木などの輝きわたるに。桔梗女郎花萩朽葉くさのかうなどの織物薄物に。あるは糸ゆふ結び。唐衣などの言ひ盡すべうも。あらぬに。唐紅の三重の袴どもゝ皆綾なり。

枇杷殿の宮の御方には。又この色々の薄物どもを。同じ數にて袴の上に重ねさせ給へり。又これなかりつる事と。いみじうめづらかなり。此御方々聞ひ合はさせ給へるにもあらず。皆心々にさせ給へるに。同じ色

ならぬ程など。いみじうをかしう見ゐたり。これに又殿の上の御方劣りげなし。

これのみならず。院の御方。關白殿内大臣殿などの御方々。いみじうせさせ給へり。見わたしたるに。これこうは日本國のいみじき大事なりけれと見るに。いはんかたなき心地すべし。天人などの飾もかやうにこそはと。推し量らるゝもめでたし。樂所の物の音ども吹き立てたる。ゐもいはず面白し。

この物みるものども。あないみじと見興ずる程に。御前近く參りよれば。かたはらいたく見ゆる程に。撿非違使の別當宗輔を召して。かれ少しのけさせよと宣はすれば。赤き衣きたるものども出で來て。弓杖をして唯打ちに打てば。とよみて逃げのゝしるほどに。殿の御前いと心苦しげに御覽じやりたり。拂ひ止めば同じやうに立ち込みぬ。此内に法師笠きたるものゝ。田舍人なりと見ゐたる。

かくて亂聲をさへしあはせたれば。いとどいみじうおどろ〳〵しく。いかなるにかと思へば。行幸のおはしましよれば。この見物の人々拂はれて。逃ぐる音の聞ゆるなりけり。

やう〳〵おはしましよる程に。御覽じやらせ給へば。經藏鐘樓南の廊などのあはひに。日照りかゞやきたる御覽じやられたるは。いとあさましう御目も及ばずおはしまして。大門入らせ給ふ程に。左右の船の樂。龍頭鷁首舞ひ出でたり。樂を合せて響き無量なり。管を吹き絃を彈き。功を歌ひ德を舞ふ。ゐもいはず御覽ずる御心地。この世の事と思されず。

（榮花物語）

日記の内

五月四日夕つかたになりぬれば。菖蒲いとなみあひたるを見れば。去年の今日。何事思ひけん。菖蒲の輿朝がれひの壺に昇き立てゝ。殿ごとに人々のぼりて。隙なく葺きしとう。水野の菖蒲も今は盡きぬらんと見ゐしか。

又の日も空は五月雨なるに。軒の菖蒲しづくも隙なく見ゐけるに。

五月雨の　軒のあやめも　つくづくと
　　袂に音のみ　かゝる空かな

とのみ覺ゆ。

やう〳〵十日餘りになりぬれば。最勝講いとなみあひまゐらせてと。聞きしかば。果てゝの十餘日ばかりの徒然物語には。りの論議と言ひ出でしいみじさなど。させ給ひし。思ひ出でらる。

六月になりぬ。暑さ處せきにも。まづ去年の此頃は。事となく御心地よげに遊ばせ給ひて。堀河の泉人々見んとありしを。何と思召しゝにか。あながちにすゝめつかはしゝかば。思召す事なれば先づ明日とて。我は出でゝ人達待ちしに。二車ばかり乘りつれて。日ぐらし遊びて歸りしに見れば。今宵とまりて。心安きところにて打ち休まんと思ひて。とゞまりしを。常陸殿といふ女房。あなゆかし。たゞ參らせ給へ。扇引など人々にせさせんなどありし。御扇子ども設けて。待ち參らさせ給ふなどあれば。此人たちに具して參りぬ。

待ちつけて。泉のありさま內々に問ひなどして。扇引今宵はさはと仰せられしかば。明けんが心げなさよ。今宵と思ふに。人たちのけしきの苦しくて。見ねざらんこゝろ口惜しく候へ。と申しゝかば。つとめて明くるや遲きと。始めさせ給ひて。人達めしすゑて。大武三位殿をば靜めて合はれたりしに。先づ引けと仰せられしかば。引きしに。美しと見しを得引き當てゞ。中にわろかりしを引きあてたりしを。上に投げ置きしかば。かゝる心うや有るとて。笑はせ給ひたりし事を。但馬殿といふ人の。家の子の心なるや。こと人は得せじなど興じあはれしに。りの折は何とも覺ねざりし事さへ。いかでさはしまゐらせけるにかと。なめげに今日はありがたく覺ねける。（讃岐典侍日記）

琵琶の聲

作者しらず

むかし元和十五年の秋。白樂天罪なくして江州といふ處に流されぬ。其次の年の秋。入江のほとりに夜友を送りけり。松風波の音を聞くに。憂の涙いとおさへがたし。

かくてさよ更け行く程に。空すみわたり。月影波に隨へるを見るにつけても。わが身一つは沈まざりけりと。思ひ亂れつゝ。人もなきさを。心細くて歩みゆくに。波の上はるかに。琵琶のしらべ樣々に聞いて。かきあはせなどの有樣。世にたぐひなき程なり。これを聞くにあやしき心おさへがたし。

海士人ものふふより外に。誰かは又なさけあるべきと。覺ければ。聲をしるべにて。誰の人にかと尋ね問ふに。我は是れ商人の妻なり。むかし齡十三にて琵琶を習ひ得たること。世にすぐれたりき。帝の御前にて一たび調べしに。百の御引出物を賜ひき。又みめかたち有難く珍しき程なりしかば。見る人聞く人。さながら思を懸け心を盡せりき。

然れども春過ぎ秋暮れて。みめかたち有りしにもあらず衰へにしかば。世にふる力うせはてゝ。せんかたなくなりにしより。商人に契を結びて。此國の民となれりき。商人なさけなければ。別を惜しむ事いと淺し。我をねんごろにせねば。出でゝいぬる後。立ちかへる程久し。歸る程遲ければ。おのづから待たずしもあらず。かゝるまゝには。たゞ空しき船を守りつゝ。秋の月の白きをのみ見るといへり。

白樂天われ琵琶の聲を聞きて愁ふかし。又此かたらひを聞くに。取り重ねたる心地す。我も君も愁の心同じからずや。かならず其愁の盡せぬ事を思ひ知るべし。我いにし年の秋より。官をのがれ都を離れて此處に沈めり。又病のむしろに臥して。立ち居る事たやすからず。いと物心ぼうき海づらの波風より外に。立ちまじる人もなきすみかには。蘆の上葉を渡る風。遠近人の舟呼ばふ音のみ聞いて。いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに。ほと〳〵天の樂を聞かんが如し。聞く人みな涙を流せり。其中にも白樂天ひとり袂くちぬと見えけり。

いにしへに　ありへしことを　盡さずは
袖になみだの　かゝらましやは

此人は。世の中の人の心は皆濁れるを。うしとや思ひけん。ひとりすまして。常は都に跡をなんとゞめざりける。（唐物語）

太政大臣良房

作者しらず

太政大臣良房。このおとゞは左大臣冬嗣の次郎なり。天安元年丁丑二月十九日。太政大臣になり給ふ。同年四月十九日從一位。御年五十四。水尾の帝は御孫におはしませば。即位の年攝政の詔ありて。年官年爵賜はり給ふ。貞觀八年丙戌關白に移り給ふ。御年六十三。失せ給ひての御諱。忠仁公と申す。また白川の大臣。染殿の大臣とも申し傳へたり。たゞし此おとゞは。文德天皇の御をぢ。太皇太后あきらけい子の御父。清和天皇の御祖父にて。太政大臣准三宮の位にのぼらせ給ひ。年官年爵の宣旨くだり。攝政關白などし給ひて。十五年こうおはせしか。大かた公卿にて三十年。大臣の位にて廿五年ぞおはせし。此殿ぞ藤氏のはじめて太政大臣攝政し給ふ。めでたき御有樣なり。

和歌も遊ばしけるとこう。古今にぞあまた侍るめる。前の大いまうちぎみとは。この御事なり。多かる中にも。いかに御心ゆき。めでたく覺して遊ばしけんと。おしはからるゝ。御むすめ染殿の后の御前に。櫻の花の瓶にさゝれたるを御覽じて。かくよませ給へるとぞ。

年ふれば　齡は老いぬ　しかばあれど
花をし見れば　物おもひもなし

后を花にたとへ申させ給へるにこう。

かくれ給ひて白川にをさめ奉る日。素性ぎみのよみ給へりしは。

血のなみだ　落ちてぞたぎつ　白川は
君が世までの　名にこうありけれ

皆人しろしめしたらめど。物を申しはやりぬれば。さぞ侍る。

かくいみじきさいはひ人の。子おはしまさぬこう口惜しけれ。御このかみの長良の中納言。ことの外に越ねられ給ひけんをり。いかばかり辛う思されけん。又世人も事の外に思ひ申しけめども。その御末こそ今に榮ねおはしますめれば。末は事の外にまさり給へりけるものを。（大鏡）

鄙の別

作者しらず

かの通憲の大德のゆかり。浦々に流されたる。皆めしかへして。世皆し

づまりたれば。内の御政のまゝなりしに。帝の御母方。また御乳母などいひて。大納言經宗別當惟方などいふ人二人。世を靡かせりしほどに。院の御ため。御心に違ひて。あまりの事どもやありけん。二人ながら内に候ひける夜。あさましき事どもありて。おもひたゝしき樣に聞こゆるを。法性寺の大きおとゞの。せちに申し和らげ給ひて。おの〳〵流されにき。此頃は召し返されて。大臣の大將までなり給へるとこそ。うけたまはれ。さまであやまたずおはしけるにや。宰相は憂き目みたりとて。頃おろされにけり。うれも歸りのぼりておはするとかや。

鳥羽院うせさせ給ひし程に。世の亂れ出で來てより。かた〳〵流され給ひし人。たび〳〵に其數おはしき。はじめの度。讃岐の院の御ゆかり。大いどのがたなど。廿四五人ばかりやおはしけん。四年ばかりありて。かの衛門督とかや聞こし人の亂れに。少納言の大德の子ども八九人ばかり。浦々へと聞こし侍りき。事なほりしかば。うの人々は召し返して。又の年の春。師仲の源中納言とかや。衛門督に同じ心なるとて。東の方へ

おはすと聞き侍りき。

しかありし程に。うの頃かの大納言宰相と二人。阿波の國長門の方などにおはしき。うの年の六月にやありけん。出雲守光保うの子光宗などいひし。源氏の武者なりし人。筑紫へ遣して。果は如何になりにけるとかや。うの人の娘とかや妹とかやなる人の。鳥羽院に時めく人にて。いとほしみの餘りにや。二條の院東宮とておはしましゝ御乳母にて。位に即かせ給ひにしかば。内侍のすけなど聞こゆ。うのゆかりにて時にあへりしに。内の御方人どもの。かく事にあへりしかばにや。又源氏どものさるべく失せんとてにやありけん。又さばかりの少納言うづまれたる。索め出でたるにやよりけん。かくゞなりにし。かやうにて今は何事かはと覺こしに。かくおはしますべかりけるを。うの折も又いかゞ疑はせ給ひけん。皇子の御方人とおぼしき人。官のきなどして又流され給へりき。大かた六七年のほどに。三十餘人ちり〳〵におはせし。あさましく侍りき。

輕きにしたがひて。やう〳〵召し歸されしに。惟方いつとなくおはせしかば。かしこより都へ。女房につけてと聞ねし。

この瀬にも　沈むと聞けば　涙川
流れしよりも　ぬるゝ袖かな

とゞよまれ侍りける。此兄に大納言光賴と聞ゆ給ひし。四十あまりにて頭おろして。桂の里にこそ籠り居たまふなれ。うれはかやうの事にかゝり給ふ事なく。何事もよき人と聞き奉りし。いとあはれにありがたき御心なるべし。

又右兵衛督成範と聞ねし。紀の二位の腹にて。うの折は。播磨の中將。弟の美濃の少將など聞ねし。衛門督の亂れにちり〳〵におはせし時。中將下野へおはして。かしこにてよみ給ひける。

わがために。ありけるものを　下野や。
室の八島に　絶ねぬおもひは。

とかや。僻言ども侍らん。（續世繼）

第三十九章　韻文の作例

其一　短歌および旋頭歌

入道式部卿のみこの子日し侍るところに　大中臣能宣

千とせまで　限れる松も　けふよりは
君に引かれて　よろづよやへん

子にまかりおくれて侍る頃。東山にこもりて　中務

咲けば散る　さかねば戀し　山ざくら
おもひたねせぬ　花のうへかな

百首の歌の中に　源重之

蘆の葉に　かくれてすみし　津の國の
こやもあらはに　冬は來にけり

題しらず　平兼盛